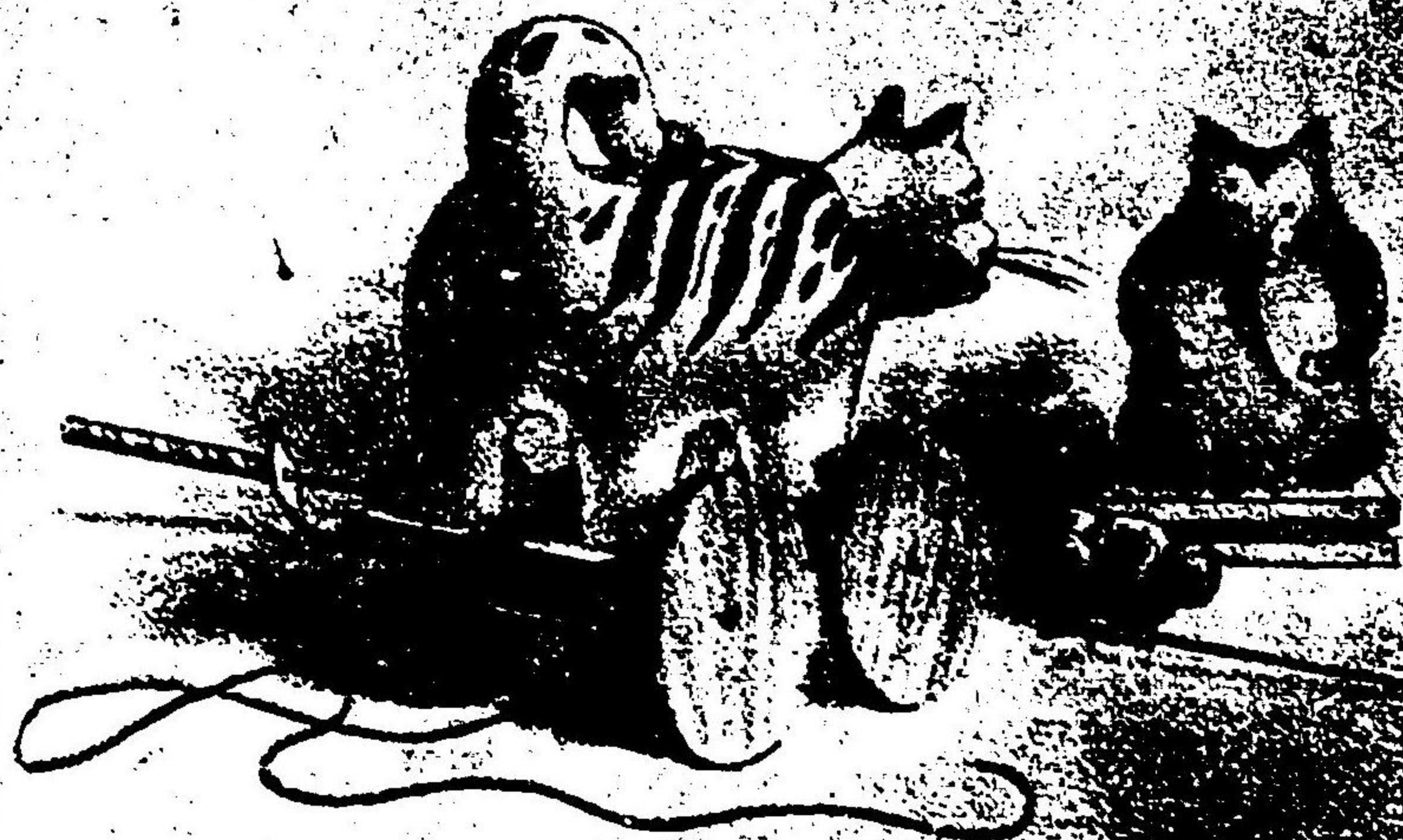


小説



春錦事
新櫻口末
下總土産佐倉双紙



佐倉双紙

№6214

下總土産佐倉双紙の序

義民と云へは其名前を云はせして誰ともア、彼の佐倉

の百も御事五郎と云へは其話しをせずして誰でも

彼は義民と云ふ人たと遠くの昔に御合點と云ふ位に惣五郎

の名は今に傳へられは諺に人は一代名に末代と云ふに惣五郎

氏其人の事し今更云ふも野暮の至りソコで又その義民の願未

の事たるの書物も止問は澤山ありと雖も或ひは文句の屁痴堅さ

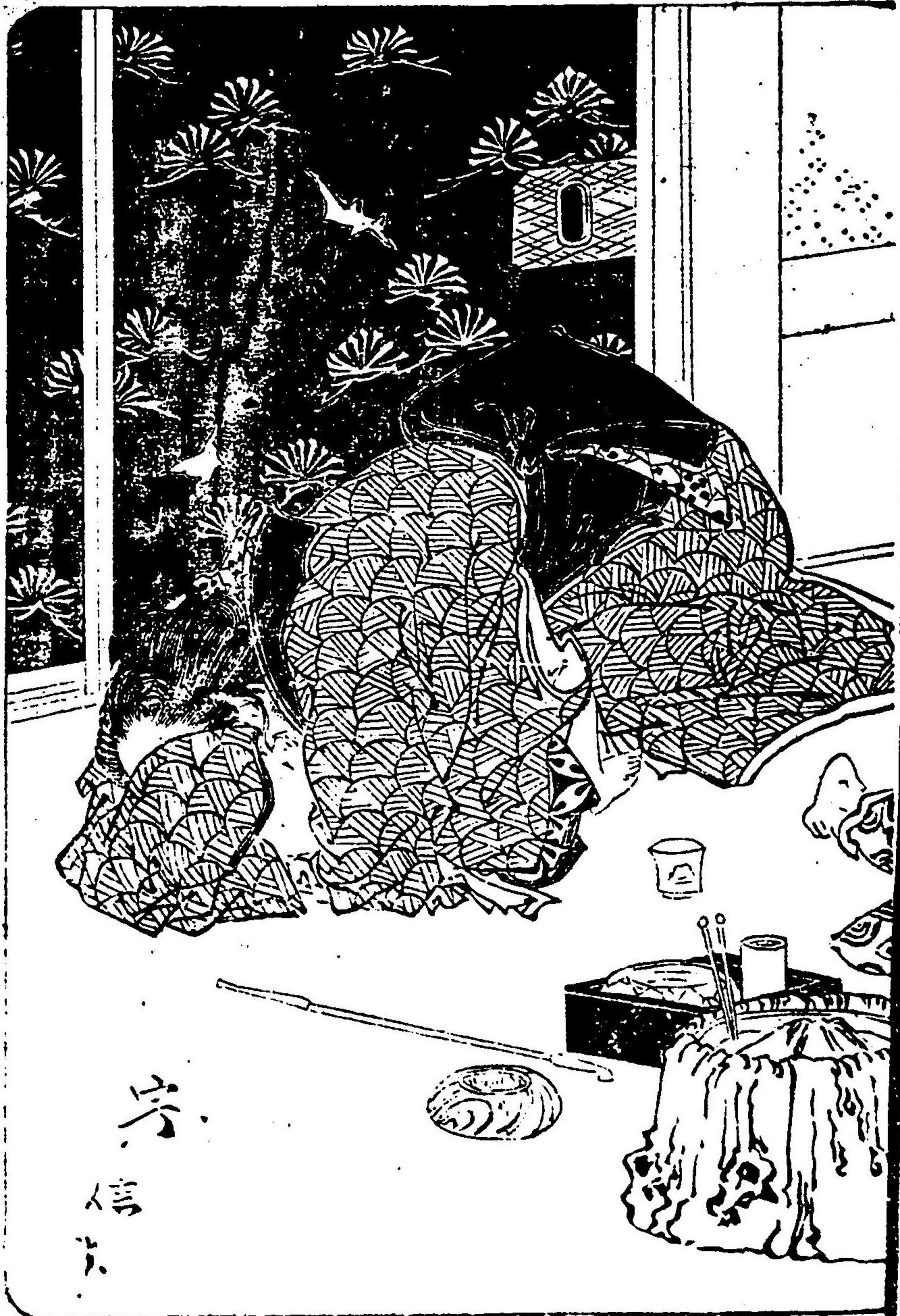
に鱗を附て却て事實を誤つて居たりする所から春錦亭柳櫻子が

曾て彼の地に遊ぶの砌り藩士某が就て其實を聽き傍ら土地の人

の話に遺つて居る事などを併せ其實説だらうと思ふ所を採て







信
大

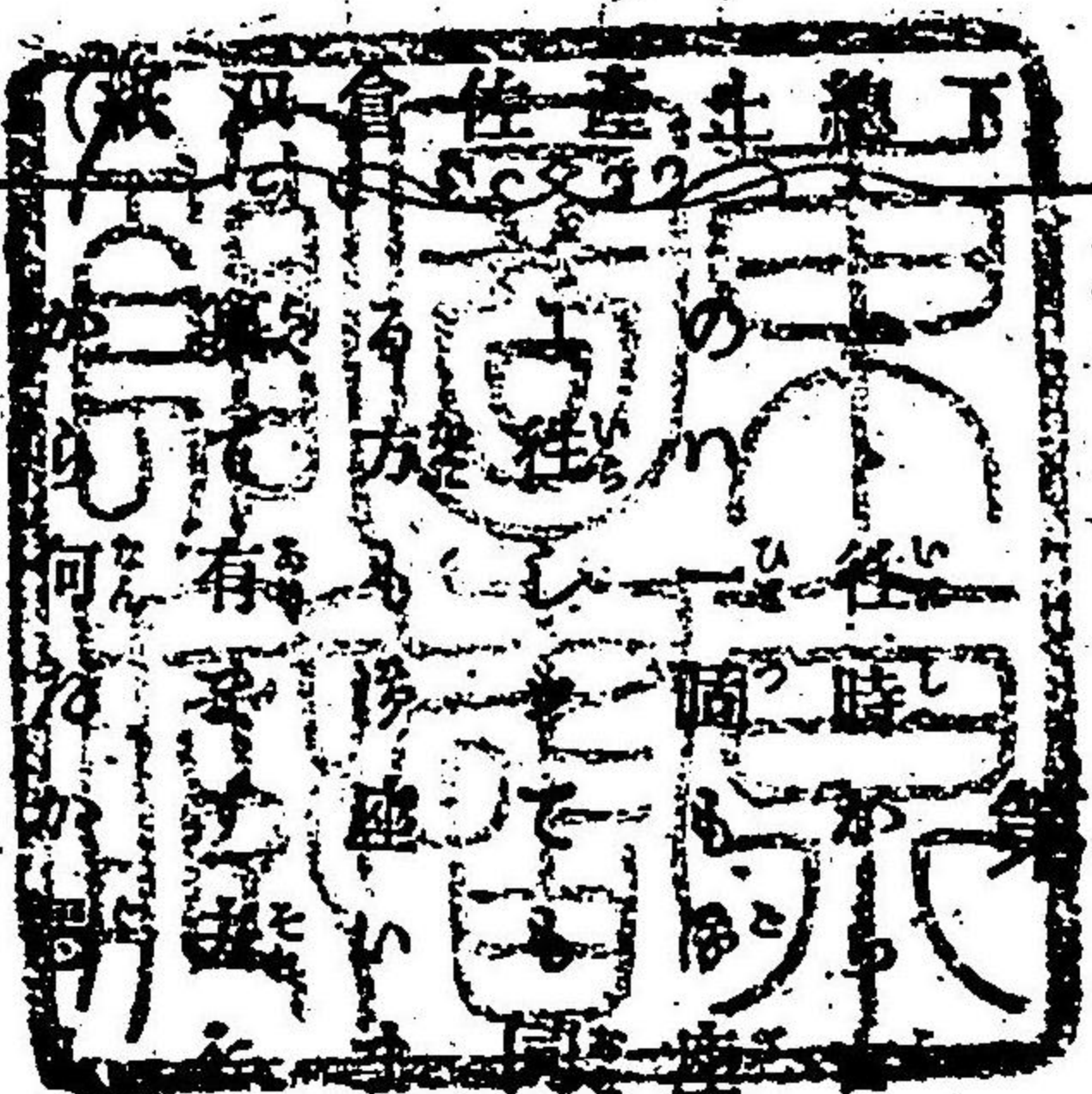
信
大



之を作為し後これを下總土産佐倉双紙と題して高座に演ず此書
 則ち是なり今や筆記法によつて一話毎に之を寫し一小冊を爲し
 て世に弘めんとするに及び書肆の主人來つて序を道人に需む道
 人受て之を讀に其事實の信と否との暫く措て中々面白く若く道
 人が學者ならば其口調の輕妙なる其辨舌の爽快なる或ひは感泣
 悲哀せしめ或ひは抱腹絶倒せしめ而して義民の事蹟其中に昭々
 として存すとか何との云ふ處なれども道人の其様を珍紛漢語ハ
 知らざる故只此本は是まで有ふれた物との違つて居て餘ほと面
 白いから爺さんもお婆さん方もお子供も何方も讀
 て御覽なさい此本を讀と佐倉惣五郎の話がスツカリ分ると申
 すの多時明治廿三年癸卯九月の下旬淺草藏前寓居に於て
 瘦々亭骨皮道人とるす

下總土産佐倉双紙

春錦亭 柳櫻口演
酒井昇 造速記



一 席
 人の殘して多座います事は無駄と云ふも
 いません就中に落語と云ふものゝ先お聞
 じ事斗り饒舌て居て愚にも附ないと被仰
 すが實の愚も附やうも皆往時の落話の編
 私を見たり愚も附やうも皆往時の落話の編
 附ぬやうもお耳も遣入りませすが往時の様
 太郎の落語杯の矢張親を大切よしろ出世を爲ろと云ふ戒
 めで爺の山へ柴刈又婆の河へ洗濯又参り流れて来た桃を
 拾ひ取て宅へ持歸ると其桃がハツと二個ふ割て中から一

(紙双倉佐産土總下)

人の子が生れて成長の後黍團粉を拵へ鬼ヶ島へ資物を獲
得り往て鬼を退治して市が榮へたと云ふ是で誠よ愚よ
も附んやうよお耳へ這入りませうが兩親を大切よ爲ろと
云ふ教で男親の恩の山より高く女親の恩の海より深い(チ
イ)の濁を取るど父とあり(ハ)の濁を取るど母とあります
其取た濁の棄どころが無から之を持つて参り(モ)へ打と云
ふと中よ(モ)の字へ濁の打ないど被仰いませうが無理給
よ(モ)へ濁を打と誠よ結構なものよ成ます其(モ)の字へ濁
を打た穴から子が生れたのでげすりやア上の天子さま
でも諸君さまでも下の私共よ至るまで皆(モ)へ濁を打た
穴から生れたので彼處より他よ出べき穴のまい乃で日本
一の君よ成やふよと設令九尺二間の家を持つても智仁勇の
三徳が具備んで一軒の家を持つて居られません大きい家

(紙双倉佐産土總下)

でも小さい家でも心の置所の同じ事で彼の桃太郎が従へ
て参る狗雉子野猿坊の智仁勇の三徳を表したもので野猿
坊の人より毛が三本足りないと云ふ位智恵の深いもの狗
の日本の仁獸で雉子の東西南北よ取ますと天王さまの
祭の時よ出る四神劔よ附て在ますが左青龍右白虎前朱雀
後玄武と申して中央の劔では座います是が五色で座い
ます全くの本統の色では座いますから真ッ白真ッ赤真ッ
黄真ッ青真ッ黒と云ふ他の色よ(マ)の字が附ません調合
致したので座いますからナ……幾ら好いからッて一茶
と云ふも可笑ければ……一茶く……呼び止められるや
うでげす四神劔の東の青く致して青い龍西の白いから虎
北の陰國で水では座いますから黒い龜の甲南の方の暖か
いから赤い雉子で中央を黄に取り劔で座います此五行

(紙双倉佐産土總下)

の中火も勝もののは座いません火が一番強い何様も固い
石でも火も係てり潰裂ッちまいます其南へ形取て赤い雉
子が出る雄氣の烈しい雉子も智慧の野猿坊仁獸の狢が桃
太郎の隨行を致して鬼ヶ島へ参ると云ふ趣向だが素より
鬼ヶ島と云ふ所の座いません胸中が鬼ヶ島で鬼といふ
ものも天狗と云ふものも無が落語家の方には随分天狗が
有ます獨斷天狗といふ奴で自分斗りと思つて杉の樹を脊負
て鼻頭を高くして居りますか調を巻て居りますか全体天地
の理合は缺て居ります牙有もの角を與へず四足有もの
よの羽翼を與へずと云ふから彼の天狗と鬼の天理も欠て
居ます天狗の手足が有て羽翼が有から斯いふもの、有る
ふ等いはい是の畜才と云ふて畜工がア、云ふものを描出
したので其證據よの天狗の生れなからよ致して(トキン)を

(紙双倉佐産土總下)

敷き脚半を附け草鞋を穿て居りますが彼様でハ靴天狗の腹
の中も足袋屋と番太郎が無ればならん勘定だが是のい
また鬼の牙が有て牛の角を戴き虎の皮の湯巻を締て居ま
すが是の鬼門を描たものでは坐いませう全体鬼の邪慳を
人の胸腹に住んで居ますから其心の鬼を去て仕舞はんけ
れハ人よの成れません
道歌恐しき鬼の住家を尋ねれば邪慳の人の胸に住むな
り
で其鬼さへ退治して仕舞へハ人間ハ必ず繁榮します
甲アソ蓄生如何して彼様も流行るだらう………好い男と
美しい女と腕車へ合乗で往がアソ蓄生願覆ッて負傷でも
すれば宜い………
杯と大きよお世話で夫が美しければ自分も早く勉強して

然ういふ境界の眞似ユするが宜しい只羨ましがッて之を
 悪がるやうな心の皆鬼では坐います他人が離遊すれば俱
 ん憂へ他人が榮へれば供に悦ぶのが眞正の人で處が中々
 然うの参りませんで羨んだり悪んだり致ますから其念慮
 を去て仕舞ふのが鬼を退治するので次は寶物とい即ち衣
 食住の三個でげすから早く一軒の主人又成て人又成れヨ
 と往時から桃太郎の話がちやんと拵へて有ますまた鼠コ
 ッコ助コッコ……と云ふ是の居起よ孝行しろ兼すよ孝行
 しろと云ふ教戒でまたチヨナくアッ、お頭マンくヨ
 ……トントのメ……杯と云ふ(現今での余りあさらんやう
 だが)是の長壽をしると云ふ教戒でチヨナくでのあいな長
 壽々々でげす長(あが)と云ふ文字壽(壽命)の壽の字を
 書ううでげすが何事でも長壽をせんければ成就致せん

短命での不可せん長命であければ不可ん人皇八十代安徳
 天皇の八歳で崩御で御座います天子と仰がれ給ふは方で
 も八才で崩御での詰りませんまた七代將軍家細公の六才
 の時將軍宣下が有て七才の時他界でげす公方さまと成
 ましても七才で死んじやア誠よハヤ詰りません仮令貧乏
 でも長壽を爲て居る中よの亦好い事が御座いますから長
 壽々々と云ふ夫から手を叩きますのの手を叩いて人を呼
 んで暮すやうなあれと云ふ教戒で諸君方の家來香属が有
 らッしやいますからおんくとお手を拍と

家來「へエ……」

と云て参ります料理へお往あすッても其通り女中や男が
 出て参りますが是の上等であければ出来ません我々共の
 居酒屋へ参り醬油樽へ腰を掛るか宅よ居まして

が押附て居ます家が狭いから多飯を喫てお代りと云ひま
 がら茶碗を出すに向ふの家へ届きます其代り夏季も成ま
 すと重寶で蚊張を釣ますと一トツ種も流しも一緒に蚊咬
 の中へ這入て仕舞ひますから喉でも潤いて水が飲度時
 別段起て水を汲ふ往すど宜しい流へ首が届くから寐て居
 て氷が飲るくらゆでげす又アツ、ヤアツ、……と云ふの
 の荷も男子たるもの碌々知らん事を衆人中に於て無
 よ饒舌るあと云ふ教戒で

道歌物云へハ唇寒し秋の風
 口の禍の門舌の災の根で又お頭アツく……上を視るな
 と云ふ教戒で

道歌上看れば及ばぬ事多かりき笠着て暮せ己が心よ
 で自分より身分の上の人を見ると竊盜根性を發するから

で大抵此處等の皆往時の人がちやんと誰よりも了解るやう
 又拵へて戒めて有ますヲテ視ると長命をせんければ相成
 ません小野小町の歌道名譽の者では座います本歌の巧
 妙ナ小町の歌よ

「像の變らで年の積れがし設命も限り有るとも
 五十六十まで生て居ても十七八の姿で終りたいと云ふ心
 で此座いませう乃で三代の上さま大猷院殿徳川家光公の
 四十八歳よして慶安四年四月二十日の多他界で其時一錢
 よ向はれ

鏡よの知らぬ翁の影止めて我面貌の何地往くらん
 ど詠れましたの自分の姿も年を老れば何處かへ飛んぢま
 ったと云ふ心で多座いませう私共も若い内の如斯じやア
 無つた小供の時奇麗な坊ちやんだつたが子返りがして

(紙双倉佐産土總下)

が佐倉の藩のお方から聽た話ゆへ併せて茲より上げます
が是の實談では座います(時よ三代の上さまの四十八才で
慶安四年四月二十日は他界な成ましたので堀田加賀守殿
の殉死を致されました(是より殉死の相成らん殉死をする
者の重類を絶すと云ふお布令が出ましたから殉死をする
もの有ません)其時の辭世よ
往末の苦樂も有らじ時を得て浮世のヒマを曙の空
と云ふ辭世を殘し三代將軍のお供をして相果まして家督
の涉子息上野介正澄殿が十八万三千石の身上を賣ひまし
たが加賀守殿のやうよの往ません些愚將で有たと視へま
すが併し古券が有ますから直に老中を命ぜられまし
が四十八高のお方々も役を命ぜられましと云ふ國へ
往事が出来ません上野介さまも老中を勤める身身分だ

(紙双倉佐産土總下)

から江戸表より佐倉までの僅か十二里だがお國へ參ら
れません是よ於て在國の家來共が不届を働き漸く悪事を
企圖んだものと視えますすまづ城代國家老杉山正の七千
五百石頂戴して居ます二番目の家老の赤石丹波是の五千
石其次が軍中總元締島勘解由下役が坂上藏太村井外記
郡奉行牧尾越後町奉行田中惣左衛門これ丈の者が悪事を
企圖んで先最初よ田地へ竿を入れました是までの三百六
十坪を以て一反と致し六十坪の農夫衆の餘徳で田の周圍
貳尺通り散米として上で年貢を取りませんから一反に
付六十坪ツ、農夫衆の儲け仕事で有た處が此度六萬石の
郡奉行牧尾越後が竿を入れてキツナリ三百坪よ引ッ縮た
から一反毎よ六十坪ツ、年貢が餘計よ成んだが大變だ此
時既よ農夫一揆が起る處を筆頭七人の名主が有ます先高

津新田上岩橋村木内宗吾郎千葉村の忠藏飛野村の伊兵衛
 勝田村の重右衛門小原村の半十郎高野村の三郎兵衛
 村の六郎兵衛此七人が村々の名主を呼んで
 「何卒此處が忍耐のしどころ……年來六十坪の實の農夫
 衆の横領で取込んで居た處だが役人が悪い斗りで竿入
 れよ成て難澁でも有ろうが……其代り名主共の給分の
 半額よするから此處の忍耐せよ
 と七人よて慰撫たから幸ひよしして一揆も起りませんだッ
 たが其他印幡沼の周圍も居る漁師の大變で是まで運上り
 取立ません處がほ子息上野介殿御代よ成まして此漁師共
 から運上を取ります處の縁へ作ても水場だから年貢運上の
 取立ません然る處此度水場も残らず年貢を取揚る事よ成
 ましたから實よ農夫衆の驚きました其上農業よ使用す

鐵鋤鎌シムリン棒穀取り糸車よ至るまで七十四通り
 具へ悉く運上を掛け剩へ疊一枚よ付年よ銀一匁天秤棒よ
 の烙印を捺して税を取り町人の十露盤草薪炭まで運上を
 取り祝儀不祝儀残らず運上を取りますから領分の者のイヤ
 ハヤ必死よ相成て居ますすけれども仕方がないから忍耐を
 爲て運上を納めて居ましたが茲よ大竹村と云ふが有ます
 其處よ魚賣の万兵衛と云ふ者が居まして年輪二十の上を
 一ツ二ツ出越して居ますものでげすが小田原町の魚問屋
 へ十一才の時から十八才まで勤めて居ましたが親父が没
 したので主人から暇を貰つて大竹村へ歸り盲目の阿母と
 二人り暮して自分の魚賣を爲て居ますが至て親孝行ゆへ
 佐倉の者が
 「万兵衛の親孝行だ

と云ふので諸方の村々でも萬兵衛が魚を賣りよ來るのを
 待て居ますから商賣も可あり有ます毎日萬兵衛の朝早く
 起て湯飯を炊き母も喫させ自分も喫べ夫から魚の買出し
 に往ますスルと今日のお袋が
 母「毎日稼人が先へ起ては飯を炊て呉れとい我子あがら
 氣の毒だ……」
 と思ひまして早く起きお袋が手探りで釜の下を焚附て居
 ます萬兵衛の些と寐坊を遣てト眼を醒し「ヨイと看る
 とお袋が臺所で働いて居ますから吃驚りして飛起き
 五「阿母ア、お止し、眼の不自由なもの其様お事
 を爲て火の用心が悪い萬一うでもない様の下は飽屋
 が有るから夫へ火が附て風でも遣入ると大變だ
 母「オヤ萬兵衛かい……和郎の稼人だ妻の新やつて居る

勝手も慣て居るから手探りで
 五「イエリヤア不可せん私が飯を炊ます
 と是から萬兵衛が飯を炊き母も喫させ自分も喫て居ま
 すからお袋の如何も氣の毒よ思ひ馬入半臺粗布巾着丁
 を取揃へ此方よ立掛て有ました天秤棒を手探りで其處へ
 取出して
 母「サア萬兵衛ヤ荷拵へを爲て置たから直に買出しよ
 往ヨ
 万「阿母さん有難う……有難うがす今日子願が有たら一
 尾持て來ますから
 母「ア、妻の願が大嗜だから余たら持て來てお呉れ
 五「エ、宜うがアす些と遅く成た
 と財布を半臺の中へ入れて大竹村の我家を立出まして

クライと云ふ處まで参ますと向ふから巡方が二人り参り
ました(佐倉の巡方の足輕衆が歩行ます絹の市松の法被を
着て大小を差し緋總の十手を持ちキリ、ンヤンと脚半を用
け草鞋を穿て居ます)今万兵衛と巡方と摺違ひも成ります
と

巡「コレく魚屋待く」

万「へエ……お巡さん只今買出しも参る處で未だ一尾も
傍坐いませんが」

巡「魚を買いのじやアあゝ其方の半盞を御せ」

万「へエ何でげす」

巡「コレ……此天秤棒の無印だナ烙印がないナ」

万「へエ是の何で……お巡さん斯でげす今朝小哥のお袋
が盲目の癖よ小哥の手助りを爲やうと云ふので手探り

も荷拵へを爲ましたのでツイ烙印の捺しては坐りません
天秤棒を出して置たのを氣が付ませんで其儘周章で携
いで参りましたから宅へ歸て烙印の有のと取換て参り
ませう

巡「此野郎……大胆奴だ毎度無印で商賣を爲て居る怪か
らん奴だサア一緒に役所へ來い」

万「何卒御勘辨を……」

巡「イヤ成らねへサア往く」

万「何を隠しませうお巡さん……今日も役所へ参りまし
て拘留られでもすると親子諸共も喰ひ兼ます何程でも
過料の出すから何卒御勘辨を……」

巡「イヤ成ねへサア往く」

と無理も天秤棒へ手を掛て引張る處を絶用さ

万「伊免あさいく……」
と謝罪ても肯ません其中よ後の方よナヲホヲと十四五人
立まして

見物「イヤお巡さん堪忍して遣らッせへ此魚屋のお袋の
眼が看へねへから間違へて出した天秤棒で撥出したよ
違エねへ……コレ万兵衛早く往て烙印の有る天秤棒と
取替て来るが宜い……お巡さん許して遣らッせへ

万「何卒は勘辨……」
巡「成らねへ」
万「小哥の事の皆さんも知てるで座います親孝行の万
兵衛どやて

巡「何を云ふのだ巳が口から親孝行もねへもんだサ予
と一緒よ役所へ可往く」

見物「お巡さん堪忍して遣らッせへ涙を溢して謝罪てる
だ許して遣らッせへヨ」
巡「何を余計な口を利く……(白眼付け)此土百姓奴
見物「オヤ土百姓どの何だ和郎等の乃公等の庇陰で腹を
滅さずよ消光るだろ何を云やアがる尿野郎」

巡「コレ……」
と云たが二十四人も居る見物だから誰が云たんだか解り
ません其中に巡方も癩ま障たから

巡「サア来い……」
と一人の天秤棒を引張る傍に居ました一人の巡方が十手
を取出し突然万兵衛の天窓を打

巡「神妙よしろ……」
万「ア痛ユ……何も打たねへッて宜いじやアとアせんか

親よも天窓へ手を揚られた事いねへや……打ねへたッ
て宜いじやア座坐りませんか
巡剛情を張からだサ往く
万兵衛の押へし手先又鮮血の染みしを見て蒲面怒を現し

万「オヤ……オイ和郎乃公の天窓を打傷たナ見ろイ斯様
に血が出らア何だッて乃公の天窓を打傷た

巡「露しいヤイ汝が剛情だからだサ往けく

と云ひあがら天秤棒を引張る奴を万兵衛の

万「余り酷い仕方……

と思ひ逆よ捻つて巡方の腕を天秤棒でボンと撞ましたか

巡「アッ……

と云て尻餅を撞と見物の待よ待て居ました處ゆへ前後左
右からボカくど一時は礫と拳骨が降て来まえたお巡だ
ッて何だッて堪りません絹の市松の法被も着物もズク
よされッちまい一人りのお巡の十手を棄て大小を小脇に
抱へて(カッライ)から周章て畝道へ逃込心處を万兵衛の天
秤棒を振冠て其跡を追驅て往のを見て見物が

甲「締ッちめへ

乙「野郎打殺して仕舞へ

丙「打殺して仕舞へ

と云れ巡方の余り狼狽て蒲の横よ致しては座います肥溜
へ中へドボリ陥落たナ

巡「アッ……コレい……

と昇りよ係る處を萬兵衛が此方から飛で参りスワリ天

秤棒で天窓を毟打た

巡アツ……

と再び陥り汚穢物を身体へ浴たがまたく昇りよ保ると
彼方此方からヤラく磔が降るやうで万兵衛がまた天秤
棒で毟打り附たから一人りの巡方のトウく肥溜の中で
寂滅で頓死してエのの幾らも有ますが是れは糞死で汚穢い

万ア……是れ……

と思ひましたから馬入半壘も其處へ棄置て大竹村へ飛で
歸りますと早くも名主徳右衛門が之を聴付け万兵衛方へ
参り

徳万兵衛其方の今も巡を……

万ハイ……コレくでは坐います皆さんが小荷を最負

よして下さるもんだからトウく肥溜で打殺しちまひ
ました

徳何してもお袋を連て早く逃ろ、道具の跡で手が宜いや

うよして遣るから

萬へエ……阿母さんサ大變だく早く私よ背負ッて下

せへ話の緩りするから

と盲目のお袋を背負ひ名主の指金で大竹村を逃去りまし
た跡へ村内の若い者が五六十人來て一人りの壘を掘出し
一人の籠一人りの寢道具と云ふやうよ持出しました人が
數が多いから置々一遍で家内中空虚よ成ちまいました處
へ役人が十人ヨリ捕縄十手を持って参り先名主徳右衛門方
へ掛りまして

巡徳右衛門此村内よ萬兵衛と云ふ魚賣が居ろり案内し

(紙双倉佐産土總下)

ろ怪からん奴だ
 徳へエー……何事を働きました
 巡上の役人へ手出し及び一人の命がある直に案内を
 しろ万兵衛を召捕りよ参た
 徳右衛門の腹の中よて儲かよ逃たのを知て居ますから
 徳何卒此方へお入来下さいまし
 徳立て万兵衛の門口へ参り
 徳へエ此家で居坐います
 巡ウン……
 と云ひおちが踏込んで観ると御殿の亮で何も無い
 悪野郎逃たよしても只今よ遠へぬへ遠くの往まい跡追
 隠ける……
 と返して来る万兵衛の印帳沼の渡へ参り船を借て船頭を

(紙双倉佐産土總下)

頼み逃る先の常州の潮来よ居る伯父の許へ行く算で
 座います只今役人が十人ヨリ印帳沼の渡頭まで来て見
 ると二三町先へ船頭が櫓を押して行く船の中よ万兵衛と
 袋が乗て居ますから
 巡ソレ……
 と云たが水の中へ驅られませんから
 巡船頭く早く船を出せく今茲へ大竹村の魚賣万兵
 衛が来たろう早く船を出せ
 と云たが船頭も万兵衛を逃し度から故意と緩りと搦へ込
 み
 船「ハイ……今飯を喰てるから最ふ些とお待ちませし
 巡コレく其様お悠長お言を云て、の困る
 船困るッたッて腹が減てるだアから然うの往きません

ヨ最ふ一膳喰て茶ア飲んで小揚子イ使つてからだ

巡チヨツ(舌打)焦慮エ畜生だあア

船ハイお待遠さま

と稍どの事で船へ乗りましたのが印輪沼ゆへ船底が吸付て

居ます尤も本統又力を入れて竿を突張れば出るんだが万

兵衛を逃りうと云ふ念が有ますから故意よ本統よ還らん

ので已上船が出ません

巡早く爲ねへかナ

船ぢやアお巡さん方情願二人り三人此沼の中へ這入て

船を押して下せへナ

巡厄介お船頭だ

と云たが仕方があいから手傳て船を押して遣り稍どの事

で水の方へ出ましたから板子を渡して遣り身体汚れた

人の水で洗ひ板子を亘して船へ乗りまして

巡船頭早く爲ろ

船ハイ……万兵衛が如何爲たアだよ

巡ナニ巡方を打殺しやアがったんだ

船ハイ、お役人が魚賣又殺されるなんア意氣地のねへ

お巡だ誠又ハヤ虚弱お巡だ

巡大き又お世話だして漕

船此船の水が浸入るだヨ破損てるから

巡ナニ水が……オイ、浸入て溢溢又成たら如何にする

船充溢又成れば沈没だ沈んぢやうのヨ泳ぎを知て居る

もの助かるが泳を知らねへ人の誠又ハヤお氣の毒だ

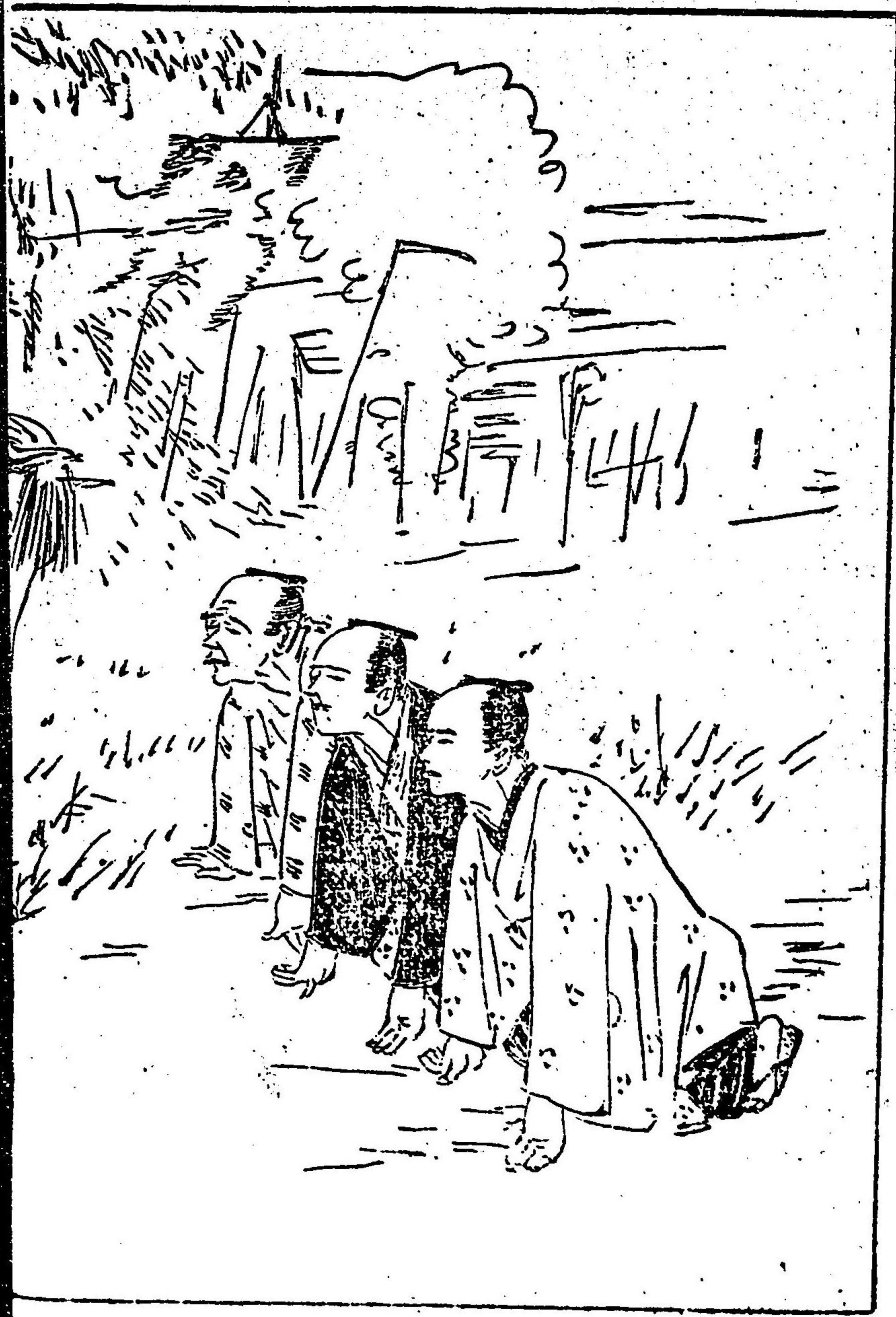
が寂滅

巡メレの大變だ……コレ、船を岸へ附て呉れ……成

程大變に水が這入て来た
船が巡りの五左衛門さんか
巡馬鹿ア云ふな元の岸へ着ろ
と船頭は謝罪るやうにして稍々船を岸へ附ました其の中
方兵衛の母を連れて印幡沼を渡り毒蛇の口を通れましたや
う又匿れ忍んで常州の湖來へ参り伯父の許に匿れて居ま
したか誠な氣の毒なの徳右衛門で名主役を召放され佐
倉領を退放と相成ました是より佐倉の御城下が感亂及
ふと云ふお話しナヨいと休息致して此後談を上げます

第貳席

二、万兵衛の先お蔭ととも助かりました副將軍水戸さ
まの御領地で御座いますから何程堀田が御老中の權勢が
有ましても逆も万兵衛を此方へ渡す氣遣ひもあし名主の
徳右衛門の何處へ参りましたか家内のものを引廻りて佐
倉領を立去りました此事の先一度濟ましたやうだが佐倉
の御城下は穀物渡世柳屋五平と云ふものが有ます是の先
來土井大炊頭さまの御領地の時分から苗字帯刀地面を拜
領して居ますから町人の首領と謂れて居ました然る處此
度堀田の御先代が殉死をなされお蔭さまの御代も成まし



てから苗字帯刀も地面もお取揚ふなりました倉庫の五月
 前も有り従来權威を輝して居ましたのが此度苗字帯刀地
 面まで取揚られましたので悉皆り下落して仕舞ひました
 五時よ悴善兵衛……支配人久兵衛や如何したものでも有
 ふ久イヤ旦那國家老杉山彈正始め係りの者残らず慾情
 で御座いますよ因て賄賂をお遣ひなれは舊の通り苗字
 帯刀地面も其儘呉ますかも知れませんが杉山が五十兩其他
 三十兩二十五兩役人の古券を見計つて菓子折の中へ金
 を入れて遣れば必ずとも前の通りよ成だろふと思ひます
 から無益と思召しなして四五百兩の金をお遣ひなすつて
 涉覽なさいまし舊の通りに成かも知れなすまい 五成程
 ……然うだらう……譯やアない三百兩や四百兩の金の何
 でもないから然う爲て觀やふと茲で支配人久兵衛の計ひ

で菓子の折へか金を納て杉山彈正の處へ五十兩其次の赤
 石丹波の處へ三十兩軍中總元締徳島勘解由へ二十五兩と
 段々區別を附重い菓子折を彼方此方へ遣しましたス
 ルと日數五日も経過ますと郡奉行牧尾越後から差紙で五
 平へ罷出ると云ふを見て 久如何でげす旦那……五成程
 番頭の思考の通だ 久何よしろ往ては覽じませ悪い事
 有ますまいと是よ於て五平の身支度よ及んで郡奉行の役
 屋敷へ通りますと正面よ郡奉行牧尾越後が主座で其他坂
 上藏太村田外記町奉行田中惣左衛門等の銘々が列座致し
 て居ます 越コレ五平よ、は先代より其方の苗字帯刀地
 面を拜領して居たる處此度は當主さまのは代よ相成り
 上へ對し差たるは徳益も之なきゆへ俄かよ苗字帯刀地面
 まで取揚ふ相成り定め難澁で有るう役人よ於ても如

何よも其方を負調ふ思ひれるに依て此度從前の通り苗字
 帶刀地面其儘に下し置れるゆへ有難くお請ふ及ぶやうよ
 ……五「ハア—」と云て其繪圖面を町奉行田中惣左衛門が渡しま
 通り賄賂が利たナと思ひましたから兩手と突き平身低頭
 よ及び五「ハア—」越「ウン—」此未とも上の御用の如
 何様の義よても否哉の申上げん大切よ相勤るといふ書面
 を上るやうよ五「ハッ—」と是から五平がめ次へ退て書
 面を認め調印を致して賸文を上へ獻ました越「ア宜く是
 で役人に於ても満足と思ふ就ての今日其方は桶樹の會所
 を申付るから左様相心得ろ—」エ、是ある繪圖面の通り
 一斗の桶を數二十、五升桶を數二十、三日間よ出來致すやう
 よ—出來致したる其方の焼印を押して早速上へ納めるや
 うよ—」と云て其繪圖面を町奉行田中惣左衛門が渡しま

したが通常の大きサの繪圖だから五平の速かよお請を致
 し繪圖面を受取て我宅へ歸て参り五「時よ善兵衛ヤこれ
 くだ善エ、お阿父さんお芽出度う御座います久「マア
 旦那さまお芽出度う御座います五「從前の通り苗字帶刀
 地面も其儘下すつた久「御覽じまし今の世の世の皆金であく
 てハ不可せん殊よ慾張た役人斗りで御座いますから—マ
 アくお芽出度ふ御座いましたさて一斗桶數二十、五升桶數
 二十併て僅かよ數四十だから譯ハない三日の間に出來致
 ましたから五平の焼印を捺て五「何よお使さるんだろ
 ふと譯ハ解りませんが數四十の桶を上へ納めツちまいま
 したスルと其年の九月頃よ成ますと二百三十四ヶ村へ郡
 奉行から致えて廻狀が廻りました其廻狀の趣ハ當年より
 町入頭樽屋五平方へ御年貢米を納めるやうよまた樽屋五

平方は於て上納米を計て上へ納めると云ふ例年の御
 上納を計る處を當年から致して町人頭樽屋五平の處へ持
 て來いと云ふ同じ事で處が御年貢は十月から始まり十二
 月納め切り又相成ます何より二百三十四ヶ村の事ゆへ
 中々五日や十日での納め切れません今日何處村くど
 七ヶ村或の十ヶ村ツ、よ別れ十月から徐々御年貢が始ま
 るんだらうで御座いますか御年貢米と云ふと上等の米で
 俵も新しく奇麗な俵へ米も餘計は計込んで有ます四斗の
 ものなら四斗一升五合或の四斗二升位も有やうな餘計は
 這入て居ます又御年貢米を計るものより上より樽屋五平の
 方へ出役又成て居ます此役人の米を計る斗りで上から御
 扶持を頂戴致して居ますから上手なもので追々農夫が御
 年貢米を持って参り此方に扣へて居ますと役人が例の一斗

桶或の五升桶を傍へ置俵の口を解ましてサアと米を覆
 け空俵のポンく傍へ投つちまいます其俵も余程米が残
 て居ませう是れ米を計る役人の餘祿又成ます今だんく
 計て見ると米が足りぬ役人「奈是斯やうな少く持て來
 た此俵の五升足りぬ……彼俵の一斗足りぬから不足米
 を持て來い農夫「エ決して足りぬい譯の御座いません
 が……役人「イヤ如何しても足りぬい」と云ふ是は於て仕方
 が無いから夫々村方へ取り又遣て納めて仕舞ひましたが
 お農夫衆の大きき驚きました「甲是れ何の耐らぬ……ハテ
 ナ如何しても足りぬへ譯のい……アノ一斗桶て……の
 が如何も容子が訝しい……」と其處又轉がつて居ます傍へ
 一人りの農夫が往て覗ますと中々一斗處じやア有りませ
 ん一斗桶と云ふのが一斗一升五合入も這入り五升桶と云

ふのが五升五合五勺遣入ります夫じやア足りまい筈だ
 乙「情願先來の通りハコ斛でお計り下さるやうよ……」
 桶五升桶の些と過大いやうと思われます夫が爲め御年貢
 の余計は計つて參ましても足りなく相成ますから先來の
 通りよ願ひ度う御座います」と云ても肯ません 役上であ
 ざる事を助言するを……」と云てお取揚は成らん時よ村々
 一同騒立ちまして 甲「彼様な事をされて農夫の喉口を詰
 られて篋棒らしい遣けろアノ五平の一旦苗宇帯刀地面ま
 でお取揚は成たものが再び從前の通りよ成た處を觀ると
 是の何でも五平の計らいで有う寸法違ひの桶を拵へ百姓
 の喉口を詰やアがつて遣けろ……」と騒立た時よ高津新田
 上岩松村木内宗吾郎殿が方々の村名主人を呼んで 宗予
 が悪いやうよの爲まい如何よかするから當年丈けの忍耐

して足ん處の納めて仕舞て吳其代り名主どもの給分の要
 んから夫で一同騒立ての相成ん殿さまのお役中で有し殊
 んは老中を勤めて在ッしやるから納むべきもの一旦納
 めんければならん」と稍と治めましたの明暦元年の事では
 座いますさて翌年よ成て百姓から樽屋五平方へ願ひ出し
 ました「御年貢米の先來の通り箱斛にてお計り下さるやう
 よ。五心得た……」と請をなし乃で郡奉行牧尾越後の處へ
 出まして 五さて農夫等私方へ参り斯やうく申し出ま
 したから何卒先來の通り箱斛にて御年貢取立が宜しう
 ば座いませう 越イヤ夫の相成らん夫故其方の上へ費面
 を献て有でいまいか如何様な事でも否哉の申さん上の
 用を相勤めると云ふ書面を献て有う其方の無念よの相成
 らん上で致す事だから彼なる桶で御年貢米を計れヨ」と云

(紙双倉佐産土總下)

れ據さく五平のヌゴ、我家へ歸り、仲善兵衛も相談す
ると、善「ア、阿父さん夫の大變事よ成ました二百三十
四ヶ村で、お前さんを悪んで居ますから大變な騒ぎに成
ませうかと思ひます、ト云て此事を無理失利に云へば地面
帯刀を取揚られ、ちまいませう……ア、仕方がない悪
い事での有ますか……」と心得ながら明暦二年も五平宅よ
於て此桶を以て年貢米を計りましたから茲でまた村々の
農夫等が騒立ましたが此度の最う宗五郎も忠誠も口
が出せません村々よて、處の寺々へ集りまして、甲斯道
て「サビ、命を取れる位ならば一時よ死去で仕舞う方が
宜い何處の國も六十余種の農具の運上を取揚其上邊一枚
よ付、一匁天秤棒までせ、運上を取り其上寸法違エの桶で
年貢米を計て米が足ねへから持て來うあんぞ云の注て、

(紙双倉佐産土總下)

るものかサア介意ねへ十五から六十までの男の總出よ爲
ろヨ……」と悉皆り相談が決定たから總出で御座いますサ
ア大變で、乙「先最初よ五平の住宅から破毀すが宜」と、
旗を押し立て、竹槍の尖を油で煮たるを携へたるもあり、或ハ
鋤、鍬、ク、ル、ン、棒を擔ぎ出し、各自よ命を的よ賭、ワ、ン、と、
波を揚ながら五平の宅を目掛けて押し参りました、此時七
人の肝煎名主が力を盡して之を制止したが中々止りませ
ん、甲「サア、火の川、慎、の、嚴、重、よ、せ、ん、け、れ、ば、成、ら、ん、ぞ、
火から先へ消て置て家を毀すが宜い火事よでも成と、
家の者が迷惑する五平の可惡が鄰家の者よの意趣も、
も、あ、い、か、ら、と、農、夫、等、ハ、ワ、ア、と、押、寄、る、を、早、五、平、の、處、へ、
注進したものが有ましたから大よ驚き奉公人の皆自分の
物を持まして逃出す五平の仲善兵衛妻もよの三人で町

奉行田中惣左衛門の屋敷へ逃込んで仕舞ひました其の中農
 夫衆が五平の宅へ押寄て参ますと七人の名主が先よ立て
 宗「マア」周章るか火から先へ消せ金銀杯を懐へ入
 れるのでないぞ喰物の喰ても宜いが心得違ひとするな
 く」と制して居ますが一同氣が立て居ますから大變あ
 ぎで御座いまじたらう先づ最初よ火を消て壁を掛矢で叩
 き崩し天井板を打拂ひ疊の目あり又切り庭の石燈籠を池
 の中へ突轉がし立木を引抜く大變な騒ぎで宗「コレ」汚
 まい事をするナ勿体ない井戸の中へ小便を放る奴が有も
 のか「ッァ」く多勢で御座いますから倏忽の中よ五平
 の宅を殘らず粉塵も打毀して仕舞ひ五平前の倉庫の戸前
 口と開て米大豆小豆澤庵酒樽よ至るまで皆往來へ擔ぎ出
 し或は打覆け甲「サア酒を飲」くと酒樽の鏡を抜てカブ

酒を飲み或ひ乙「餅でも何でも持て往」くと他人
 の所有だから大風で互よ手取り奪取りよ及び各々持て参
 る甲「五平の家」最ふ澤山だ是から如何しやう乙「介意
 ア事いねへ是から家老杉山彈正の屋敷へ押掛る軍中總元
 締徳島勘解由の根城と乗取て籠城しろ到底乃公等の死去
 んで仕舞うんだから往掛の駄賃だ遣つけろ」ワァ
 ど大變あ騒ぎで御座います處で堀田大和さまと云ふ方
 は「先代加賀守さまの弟よて澤庵主上野介さまの叔父上
 ですが千石を頂戴し無役でお在さる誠に良方方で御自
 分の娘を杉山彈正方へ嫁よ遣て有ますから折節杉山彈正
 方へ参りまして大「在町の者共が困窮致して居るから最
 りつと政治を寛大よ爲たら宜ろう」と御異見をなさいまし
 たらうが杉山彈正の如何も懇張で居ますから中々肯入

れません夫ゆへ大和さまも出ての面倒だと思召し不快と
 偽てお出よ成ません 大「ア、一仕方がない不良役人が余
 計居るから其ものが一人位有ても押付んと云て在しやい
 ましたのが今日此騒ぎゆへは近臣を召て 大「何事じや……
 近臣「ハッ……百姓どもが一ツ揆を企て町人頭五平宅を
 打毀し是より此家老方へ押掛て参ると申し居ます。大
 「ム、ウ……夫の大變……棄置ては家又拘はる」と大和さ
 まの顔色を變へ直よ馬よ鞭をめて馬丁一人召連たまひ其
 場へ馳付て看ると農夫等の鎧旗を押立て竹槍を揮廻しワ
 「ア、くツと砂煙を蹴立て家老杉山正の屋敷へ押掛やう
 とする處ゆへ大「コレ、コレ、一一同扣へろ、堀田大和で有
 る悪いやうよの致さん扣へて呉先來の通り箱持よて年貢
 を取る事よ致すから今日の鎮靜て呉れ……此中よ千葉村

の忠藏の居るか……高津新田上岩橋村木内宗吾郎の居る
 か兩人此處へ出るやうよ……と高聲よて呼はれました
 此時宗吾郎忠藏の兩人が大和さまのお乗馬の端へ参り大
 地へ兩手を突き首を下げて居ますのを御覽なすつて大
 「コレ宗五郎……忠藏今日の騒ぎはなんじや此大和も殿て
 聞及んで居るが今日の處の御國恩を辨へて居れば各々村
 々へ引取て呉悪いやうよの致さん万奉此大和が心得て居
 る先來の通り箱持で年貢米を取立るやうよ計うから……
 左様な狼藉を働くよ於ては殿さまの御名義も拘はり御
 家よ拘はる事ゆへ引取て呉れ其代り大和が刀よ掛て其方
 等の所願を取揚て得さするよ依て今日の速かよ引取て呉
 れ、宗「ハァー……有難う御座います此一揆の起ります前
 私共が斯やうくよ計ひましたが又々當年寸法違ひの極

まで御年貢米を取立られましたので御覽の通り最早七人の名主共が制しても一同気が立て居ますから中々肯ませんが何卒先來の通り箱柵まで御年貢米を御取立下さるやう願ひ度う御座います……サア皆の者聞て呉れ今大和はまが斯やうく下仰て其方等の願ひ通り又成から何卒今日皆村々へ引取て呉と一々村名主を呼で傍附けましたが兩人(宗五郎忠(家)位)だから中々屈きません群集の中からは甲ハイ大和さま有難う御座りやす尊公さま斗りが本當のお役人さまで御座りますハイ今日の尊公さまの云ふ言を肯て村々へ引去りますハイ大和さま有難う御座ります何卒百姓を一同助け下せまじ二百三十四ヶ村の難儀を救つ下さる有難う御座ります大和さま……乙大和やア……甲何だア剛弄すな……」と是に於て一同村々へ引取

りましたから大和さまの直よ杉山彈正の屋敷へ参り大「さて今日御自分も知て居るだろうが斯様くの騒ぎにて此奥公儀へ聞ゆる時の御家よ拘ゐる一大事で有る強て御自分等が之を聞容んど有れば己を得ず江戸屋敷へ参り直接よ殿さまへ申し上やうか殿の御存知もあさむ怪からん事

で御座ると云放たれ杉山彈正の心中大に驚きましたか義理有る阿父ゆへ体克取繕ひ 騷イヤ拙者の一向又存ぜん夢も知らん事で御座います」と云ふ是より軍中總取締島勘解由始め夫々係りの役人を取調へても皆知らんく」と云ふので大「ハ、ア……是は何喰ん事を云て居るんだナ」と思ひましたから大「何卒先來の通り箱柵まで年貢米を取揚るやうな爲て呉今日日稍と鎮静たから 騷何卒一献召上るやふよ……」と是から酒も成り大和さまの此夜

亥刻時分よ宅へ歸りよ成ましたスルと翌日から致ま
 して何うも身体の工合が快くあいな腹が下痢五体が痲痺
 るやうき盤梅ゆへ醫者を呼んで診察させると醫は何
 かお毒の中たよ違ひ有ませんと云ふレテ視ると杉山正
 が御酒の中へ毒を入れて大和さまと飲したと見へます此
 事が原因で大和さまはドツと病褥に成ましたが二十日斗
 り經過て御病死で御坐います之を聞きましたから二百三十
 四ヶ村の肝煎名主を始め名主百姓共よ至るまで歎息を致
 し一同ア、一不可ん最早十八万石の御身上も常闇よ成
 たと云ふすると榎屋五平并よ伴善兵衛妻もよの三人とも
 半へ打込んで仕舞ひ其上薬を用ひて五平の牢内で口の利
 けんやうに爲て仕舞ひ五平、一と延を垂して居ま
 すのを白洲へ呼出し役人其方儀す法違ひの桶俣を出來

ひ二百三十四ヶ村の者を苦しめ重々不屈よ付佐倉領引越
 しの上茨臺よ於て磔刑よ行ふものありと申渡され榎屋五
 平の茨臺で磔刑よ揚つらまいましたは誠無理を事て妻
 のおもよ伴善兵衛は佐倉の領分界(チコナ)の原(矢張小金
 原で小金ツ原へ出ると最ふ領分違ひよ成ます)よて浮條目
 を讀開かせ牢内獄衣のまよで追放とあり五平の家財の没
 收らまいました(一医の者が焼の爲ませんから大方筆筒や
 萬籠の中へ油を注ぎ込んで有ましたらう)善兵衛と母お
 もよの茫然りとして(チコナ)の原を一町斗り往よ係ると何
 處も匿れて居ましたか百姓共が五六十人各自よ六尺棒
 ルリン棒或ハ天秤鋏を持て躍り出し◎其奴を殺し
 ちまへ」と云ふ善兵衛の大きよ驚き阿母を殺されての
 大變だから阿母を庇陰ひ善皆さん何卒お袋ばかりたす

けて私丈を殺して下さいまし」同一の氣が立て居ますから
 何の用捨もあく打掛ろうとする處を 宗待く待て……
 必ずしも善兵衛とんや内儀さんよ手出しをするんじや
 アあいぞ是の上の役人の計らいだ五平どのの不屈での
 いから……強て手出しをするから手から先へ殺して係
 れ……と高津新田上岩橋村木内宗吾郎又制されましたの
 で一同手出しが出来ません ◎イヤ木内の旦那さま何だ
 ツて悪人を庇陰ある五平の磔刑又成たから腹が癒たけ
 んど此奴等も百姓の喉口を詰やアがつた悪人の黨類だか
 ら歐殺して仕舞うんだ宗五郎どん退て下せへ…… 宗イ
 ヤ必ずしも五平段の不屈でのあい上役人の計ひで有る予
 が悪いやうよの爲あい何卒願ひだから此兩人を助けて
 下さいと大地へ兩手を突て謝罪れ滅あく一同は脚鉄を搦

いて引去りました跡で 宗さて善兵衛どんまことよなさ
 けない事に成まして和郎の親御の磔刑よ行のれ定めて心
 外で有ませう其上和郎方兩人まで殺うと若い者一同よ
 氣が立て居るから仕方もないが和郎の是より那處へ往し
 やる胸算だエ 善ハイ……船橋宿よ松屋平八と申して宿
 屋渡世を致して居る者の母の弟で御座いますから一度此
 處へ参りましたして夫から先の如何ありますか解りません……
 …… 宗ム、……船橋へ往の宜いけれども獄衣を着てい
 往れまいから東吉や(下男の名)風呂敷を茲へ出したと中か
 ら着物を取出し 宗「コレへ予の妻おさんの着物で有ます
 が是とお着替あさい……善兵衛どん和郎の予の着物を着
 るさい……然して此金の少い路用として一兩進ぜるから
 …… 誠よ輕少だが船橋までの往やう天の見通しだから何

れ復讐は政府で取て下さる仕方がない恐い領主を討たど
歸めて一度船橋へ沈着て居あさるやうよ……
……誠ま種々有難ふ座いますと宗五郎を伏拜み着物と金
子登兩を賞ひましてスゴくと(チコナ)の原を立出て船橋
宿の松屋平八方よ匿れて居ましたさて宗五郎は斯う云ふ
搦梅よ致ますから成程人望を得まして百姓の龜蟹と云ふ
のは木内宗五郎と云ふ方で御座います時よ五平を磔刑
よ致まして一度び上役人の不届であいうや致し治めま
したたがドッコイ然うは往ん其翌年の明暦三年正月十七
日か焼出せしめた行坂の振袖火事は江戸中へ延焼
した大ら火で御座います其時淺草に在りました堀田さまの
上屋敷も類焼致しました其事よ就て五ヶ年二割増の御年貢
と成り是より大よ驛立て將門山へ屯じて遂ひ江戸表へ
罷出門奏よ及ぶと云ふお話の次第よ申上げます

第 三 席
へツエー梅屋五兵衛の引廻しの上次臺で礫よ相成悴の儘
兵衛母もよの兩人の猫名の原が堀田様の領分境で有か
ら此場所よて追放よ相成據處なく夫より船橋宿併屋平八
のあもよの弟傳兵衛の伯父よ當る故其家へ食客よ相成處
迄申し上ました是よ於て佐倉の城下も一度或乱が鎮静ま
したのの恰も明歴二年で移坐いますすが明歴三年の何事も
なく翌万治元年十月朔日の事では坐います二百三十四ヶ
村へ廻章が廻り其廻章を見ますと若君様は祝よ付願分の
百姓共へ青銅一貫文宛下し置れるよ付村名主どもよ印形

をもち牧尾越後の役宅へ明朝五ツ時よ出頭いたすべくい
牧尾越後の名主共へとある廻章では坐いますから二百三十
四ヶ村の名主が寄合まして 甲「何だへ珍しい事である此
塩梅では西から天道様が上りやア仕ねへか今まで百姓と
もを奇酷しヤアがつたので大方其邊の所よ氣が付て一貫
文宛吳るんであんなに悪い事ちやアあんなに」と二百三十
四ヶ村の名主が印形をもちて郡奉行の役宅へ出かける様
子を木内宗五郎の早くも察し是れ何か役人共の計らひよ
て又々壓制を働くよ違ひないと思ひ組合の喜右衛門を呼
びて 宗「借此度は是れ々々斯様で和主も知ての通り牧尾越後へ
出頭仕れと云ふ廻章が廻つて来たんだが私の思ふよ印
形を持参すると大變が出来ると察したから持せすに違
るから万一役人が開たらあ愛たで座いますから多分印

形の入まいと存まして持参致しません宗五郎の不愉快と聞
て和郎が代理又出してお呉れ 喜「ハイ畏まりました」と茲で
組合の喜右衛門が印形を持参せずと往ました何しろ五ツ
時と云ふので有ますから二百三十四ヶ村の名主の郡奉行
の役宅へ廻らず集まりました處が平生と違て役人ども
が誠又可憐又致して 役「是れ」皆の衆大層早く出頭致
したあサア 此方へと云て坐敷の唐紙を取拂ひまして
廣い座敷へ二百三十四人と云ふ人が集り下役村田外記坂
上藏太が取持て居まして此方へ 甲「と平生よあ取扱ひ
で御座いますから名主どもに不慮致しおもつて居るうち
には菓子が出る茶煙草盆等を出して最も丁寧致すか
ら名主共の顔見あわせ 甲「何だへ不思議ぢやアねへか何
でも此鹽梅でいよく成て雪でも降りやアしねエか百姓の

お蔭で十八万石の運上を餘計取て役人共が皆浪費ちまう
 んだと各々内々で相談をして居ます内は酒好しの酒下戸
 の甘ひ者と二通りに分て酒を飲せ十分は甘ひ物を出し
 酒の好な者の此方へと云ふので各々此處へ集る何しろ着
 の十分は出まして刺身煮魚茶碗口取等と平生食付あい者
 を食ふから酒好の者の大杯で引受る甘い物好の最うお飯
 が宜るうと云ので其氣で十分食し酒呑の十分は酒を呑ま
 したから餘程生酔が出来ました借只今も首領牧尾越後と
 のが村名主とも對面を致すと云ので此處へお出席が有
 から左様心得る様よ一同「ハイ……」と云て一同形容を改
 めます内は正面の唐紙をサツト開ますと樽の上にお首領
 の郡奉行牧尾越後が着座よ成ますと一同又頭を下る中よ
 て食過た名主の腹が充満でお辭儀が出来ません 甲「コレ

に辭儀を仕ねへか 乙「エ、めねへ〜」 甲「うん、あゝ食ね
 へでも宜いじやアねへか 乙「何うかお願だから一吸飲し
 て呉ねへか 甲「ナンダ煙管が膝の前よ有じやアねへか
 乙「煙管の幽かよ彼處に見へるが無理やりは喰込だから喰
 過て下が屈めねへから手が届かねエのだ先刻腹の皮がア
 ッリと云ふ音がしたから懐中へ手を入れ搜て見ると越中
 禪の紐が切たんだ中よも甘い物の好みやつの慾張て家へ
 土産は持て往ふと云ので飯頭今坂を紙へ包んで袂へ入れ
 て胡魔化す者もあり酒好の者の栗のキントン蒲鉾や何か
 を紙へ包んで持て往ふと云のもあり各十分は食酔て居ま
 す 役「イヤ借村名主ともうの方達が年々出精いたしくれ
 るので上でも満足と思召される今日は無禮講で有るから
 腹藏あく酒の好な者の飲まする様よ牧尾越後取持を致す

から一同「ハイ難有うは坐ります」と是よおめて牧尾越後
 が杯を執り先拙者より始るから皆酒好の者の拙者の杯を
 受ます様よと五合入の杯數十口程大勢の中へメット出す
 一同「ハイ難有うは坐ります腹藏なく頂戴致しまする越
 後」苦敷うあいから平らよ居れ君よもお悦びで有所だから
 十分飲で呉れ無禮講で有るぞ一同「ハイ……」甲珍敷い
 郡奉行様が斯遣つて取持をして呉るんのは難有てへな
 ハイ十分に頂戴します……ア、難有へ……」と飲過た上よ
 大杯で二杯も三杯も呑ましたから恰で鯛が泥よ酔た様
 よ成ました越後、借名主共其方たちよ今日やし告る事が
 ある百姓共が年々出精致すよ由て上でも殊の外お喜悦遊
 しまして青銅一貫文宛を銘々よ下し置れる就ては銀札よ
 て渡し遣のすあり尤其銀札の來春より通用を致すから左

機心得ます様就てハ村の名主どもよ百匁宛褒美を下だし
 置れる是も銀札にて渡しよより來春より矢張同様通用い
 たすべし今日ハ札よて渡しよ相成から難有く頂戴致様
 よ一同「ハイ難有うは坐ります越就てハ此上共上の伊
 用ハ何事よ寄らず相勤ると云ふ証文を上げて宜かり何じ
 や」と云ふ此方よて下役の村田外記坂上藏太が、役何じや
 名主共お首領の言葉の如く何事よ依らず勤めると云ふ
 証文を上げて宜かり何じや……一同「否ハ有まいな……」
 太「ハイ難有う御座ります何事よ寄らず御國恩の爲ハイ
 何様お御布告でも承知仕ます銘々の格別大佐倉村の太郎
 兵衛よおいてハ何な事でもお上様の事ハ屹度勤めます併
 ながら謙退るがら恐れあがら去あがら甲何を聞てるん
 だ太「此御屋敷で御馳走よ成た上の否ハ云へねス云ふ

鹽梅よして呉れば身を粉に碎いても宜い……何様の御座
 文でも差上ります。越コレ名主ども其事の出府致たる御殿
 様へ申し上たら又々御喜悅になるだらう然らば御証文を
 乾度上げるか。役借は証文を上するか。銀札を御渡しは相
 成から銘々印形を持参して有だらう。一同印形持
 参仕りました。役大野村七兵衛。七ハイ此處に居ます
 役印形を是へ出せ。七ハイ是は御座ります。ウの村々と呼
 での印形を取上げては……と執てまいました。●役高津
 村新田上岩橋村木内宗吾郎……木内宗吾郎の居らんか
 甲「ハイ宗吾郎の何だへ。乙「木内の宗吾郎の病氣で寐
 て居るから代理の組合の喜右衛門さんが来て居るよ……
 喜右衛門さん……何處へ往てるんだらう。丙「喜右衛門さん
 の食過て様側は寐込でるから起して引張つて来て呉んね

へ。丁「コレ喜右衛門さんお役人様が呼で居るよ。喜「ア……
 ……ハイ……甲「宗吾郎の印形を持って来たろうか。喜「イ
 、ヤ持って来ね。甲「何故持って来ねへのだ。喜「ウン……今
 日の愛度へ事だから印形の入めへと言た……宗吾郎の
 大病で寐て居るから持って来ね。甲「来なければ来ない様
 よ。お役人へ申し上ね。喜「ハイ……高津新田上岩橋村木
 内宗吾郎代では座ります。役「其方の宗吾郎の代か。喜「ハ
 イ俺で座ります。役「印形を持参致したるふか。喜「イ、
 エ持って来ません。役「何故持参致さん。喜「宗吾郎がは愛
 たよ。附て百姓は青銅一貫文宛下さるんでお愛たなれば印
 形の入るゆへと云つて宗吾郎が兎角不快では座います
 から私が代りよ来ました。ハイ印形の持参致しません。役「白
 痴者奴彼位は廻章よ認て有ちやア。あいか早く持参して参

れ 今日持て参らんければ明朝早速當屋敷へ持て出る様と
 と跡の者の印形を執て獲らす調印爲て仕舞まして借名主
 共へ証文を讀聞せるから神妙よして承る様よ一同ハイ
 …… 役「静よしろく……」と証文を讀聞さんど坂
 上 瀬太出て証文の趣を一同へ達しました其文面の一此度
 江戸は屋敷よ於て非常の物入有之よ附ての當年より五
 ヶ年の間二割増は年貢は國恩の爲に度上納可仕候爲後日
 上置申証文依而如件村名主の者の調印獲らず取て讀聞せ
 られたから大に驚いて喰酔た一同の者の醉が醒ぬ計りよ
 驚ひて一同夫りやア大變では坐います何卒お願では坐
 いますから印形をお返却下さいまし小前の者一同よ此職
 を致やすと私達がおツ殺されます二割増の所へ何卒……
 役「扣へろく 其方達が調印を致たちやアねへか 甲「然

んること存せんで翌年通用の青銅一貫文よ我々に百
 匁の銀札を下さる其は禮の爲よ調印を致ましたのだから
 印形の一旦返却下さへまし私達の村へ歸られません
 役「退れく 印形の首と釣換のもの如何よ喰酔ておて間違
 だから返せとい今更怪からん……サア往く」とドンく
 突出し襟首を掴んで丸で投出される様も鹽梅ゆゑ懐中か
 らの饅頭今坂が頼げ出すといふ騒ぎ二百三十四ヶ村の名
 主ども獲らす立關から突出され枚尾越後の屋敷を立出で
 甲「何たへ驚いた腰味よ掛やアがつた何と酒を吞せやア
 がつて酔て居る處を印形を取らまい証文の趣を聞せた上
 御國恩の爲め五ヶ年二割増の証文を取りやアがつて何だ
 んべエ 乙「腰味だ是から村へ販る事が出来ねへ是の大變
 だ……何したら宜かろう…… 喜「何だへ和主達の銘々よ

六十四
 入らねへ持て往く不快だと云つて此所へ出ねへ所の何
 だへ宗吾どんの大層者だい和主達もナット宗吾殿の爪の
 垢でも煎じて呑むが宜い 甲成程斯成て見りやア印形を
 持て來ねへ方が宜かつた此ン事どの知らねへで居たが
 ……ハア何したら宜かろう 喜何でもハア俺の村方
 の宗吾殿の先日本一の伶俐だんべい大層者だ」と高々と
 自慢され皆眞青よ成て村方よ歸りました喜右衛門の直よ
 歸て來まして 喜借禮那どん斯様く御座います 宗
 大方然んな事で有ろうと思つて居た直よ村々へ廻章を出
 して報知るが宜い」と廻章を以て今日斯様く 木内宗吾
 郎の印形を持參致しませんで彌印致ません何しろ當村内丈
 の二割ましの年貢が無いから安心する様よと云ふ是よ由

六十五
 て二百三十四ヶ村の内上岩橋村だけちつとも騒ません
 是の名主が宜計で御座います跡の大變何もしろ之を伏て
 置譯よいかないはやく百姓共の耳へ入あければならんと
 云ので寺々へ寄集り二百三十何ヶ村と云ふ村々の小前よ
 觸るとたちまち惑乱して今取立られて内容易であ此上
 取られる位なら一層一ト思ふ殺されて仕舞つた方が宜い
 コリヤ大變だど皆將門山へ集つて評議をする事よ極め十
 五才より六十才迄物出と云ので將門山へ集つて筆を焚き
 女の兵糧を煮くと云ふ何の事のない山火事を見た様で只
 リツく云ふ騒ぎ村々の年寄小供の逃る様よ言觸し銘
 々梅干し握飯の用意をしてマケエ赤紙と黄色紙白い紙と
 色々の紙印を結付て丸で西瓜を見た様よ村々を分て居ま
 すから能く解ります名主共が 名ヤア此中で木内の宗吾

殿が見へねへが何故来ねんだ印形を持して還らねへから
 つて上岩橋村ヨリ密りして居るの夫やア分らん二百三
 十四ヶ村の内で一ヶ村計り騒がねへで密そりして居て
 濟めへ然云ふ法に無へ上岩橋村の印形を持あいからい
 やと云つて知らん顔ノ宗吾殿で居ての濟むへ進付ろく
 掃ふ事の無エ往掛の駄賃だ家も藏もみな崩して……仕舞
 へ事又容りヤア郡奉行の屋敷も還付ろ往掛の駄賃だもッ
 殺せと一同又騒立を千葉村の忠藏が待く……悪い様よの仕
 ねへから待て呉れ上岩橋村へ押掛て往くなら俺から先へ
 殺して往け悪い様よの爲ねへ己が宗吾を引張て来るから
 何うか鎮靜て呉れ灘澤村の六兵衛が出て六「借忠藏殿ま
 とよ此度の騒ぎの一方あらん事だ又筆頭で居あがら宗吾
 殿の面出をも仕ねへで我村さへ宜ければ他の村の者の儀

倒ても宜いと夫ぢやア濟めへ忠「ア」六兵衛殿此忠
 藏の宗吾の養父の與三右衛門どの飲分の兄弟分だから私
 が往て宗吾を引張て来る又宗吾が来ない様あれば此忠藏
 の再び將門山へ歸らん俺又任して呉れる様よ兎も角私
 木内の主人を引張て来るからと云へバ一回何か願ひ
 ますし……是より忠藏の獨りで高津新田上岩橋村へ参り
 ました宗五郎の妻のお三又言付て有ます私の作病をつか
 つて居るからと納戸へ遣入り頭痛も仕ないのよ向鉢悉を
 致し寐て居て人が来れば夜具を被つて寐た振りをして成
 丈け人よ會あひ様よ致してゐる所へ忠藏が門の戸をガラ
 りと明け忠「ハイは免三「オヤア」お出あさいまし忠
 借此度の騒の宗吾殿も聞て有るうが一方ならん騒動だ
 時よ旦那どんのは病氣のどうだ餘程重いかへ三「ハイ」

有^あり存^{ぞん}じますすたいした事^{こと}でも伊座^{いざ}いませんが風邪^{かぜ}を重^{おも}く
 致^{いた}まして困^{こま}ります忠^{ちゆう}就^{じゆう}ての宗^{そう}吾^ご殿^{でん}よ此^こ忠^{ちゆう}藏^{ざう}が一寸^{いっすん}會^{かい}た
 いから來^きたと然^{しか}り取^と次^{つぎ}でも呉^{くれ}れ亦^{また}宗^{そう}吾^ご殿^{でん}が俺^{おれ}よ會^{かい}事^{こと}が
 來^きさいと云^いつしやれば忠^{ちゆう}藏^{ざう}の我^{われ}家^かへの飯^いらん所^{ところ}存^{ぞん}で有^ある
 よ由^{よし}て迎^{むか}ひよ來^きましたと言^いて下^{くだ}さい三^{さん}ハイ畏^{かしこ}りました
 とお三^{さん}ハ三^{さん}之^の助^{すけ}を抱^{いだ}いて納^{たくわ}戸^この方^{かた}へ遣^は入^いりました宗^{そう}吾^ご郎^{らう}の
 忠^{ちゆう}藏^{ざう}の來^きた事^{こと}を遂^{つい}から知^して居^ゐますから確^{たしか}と梅^{うめ}の上^{うへ}座^ざつ
 て居^ゐます三^{さん}旦^{たん}那^な様^{さま}只^{ただ}今^{いま}忠^{ちゆう}藏^{ざう}殿^{でん}が來^きました宗^{そう}然^{ぜん}うか……
 む三^{さん}是^{これ}の仕^し方^{かた}が奇^あい將^{まさ}門^{もん}山^{さん}へ屯^{とん}ろ致^{いた}したと聞^きたから往^いな
 ければ成^ならな……お茶^{ちや}を入^いれて出^です様^{さま}よと言^い付^つ乃^ので宗^{そう}
 吾^ご郎^{らう}の一間^{いっけん}を出^でて宗^{そう}コレハく忠^{ちゆう}藏^{ざう}殿^{でん}此^こ度^{たび}の騷^{さわ}動^{どう}定^{ぢやう}め
 て心^{こころ}配^{はい}で伊座^{いざ}いませう俺^{おれ}も出^でさければ成^ならんが伊座^{いざ}の通^{つう}
 り不^ふ快^{かい}で夫^{つま}故^こも出^でませんのだが困^{こま}つた事^{こと}が出^で來^きました

忠^{ちゆう}「イヤ最^もう一^{いっ}方^{ぱう}あらん騷^{さわ}動^{どう}で何^{なん}うか俺^{おれ}と一^{いっ}緒^{しょ}よ將^{まさ}門^{もん}山^{さん}へ
 來^きて下^{くだ}さい……宗^{そう}夫^{つま}ぢやア一^{いっ}緒^{しょ}よ參^まりませう」と宗^{そう}吾^ご
 郎^{らう}の妻^{つま}よ向^{むか}ひ宗^{そう}コレ三^{さん}ヤ羽^は織^{おり}又^{また}脇^{わき}差^さを出^でして呉^{くれ}る様^{さま}よ
 三^{さん}「ハイ……貴^{あなた}公^{こう}伊座^{いざ}病^{びやう}氣^きで將^{まさ}門^{もん}山^{さん}へお出^で成^なさいまして
 體^{たい}の爲^{ため}よ成^なりますまい病^{びやう}氣^きで伊座^{いざ}いますから忠^{ちゆう}藏^{ざう}様^{さま}よ願^{ねが}
 ひやして宗^{そう}イヤ夫^{つま}の如^{ごと}く二百^{にひゃく}三^{さん}十^{じゅう}四^しヶ村^{むら}の内^{うち}で上^{かみ}岩^{いわ}松^{しょう}
 村^{むら}一^{いっ}ヶ村^{むら}落^お付^つて往^いきあいで居^ゐられぬ殊^{こと}よ寄^よると宗^{そう}五^ご郎^{らう}一^{いっ}
 度^{たび}將^{まさ}門^{もん}山^{さん}へ往^いけば家^{いへ}へ歸^{かへ}る譯^{わけ}よないくまいと思^{おも}ふから子^こ
 供^{こども}四人^{にん}の何^{なん}分^{ぶん}とも願^{ねが}ます……就^{すなは}ち此^こ脇^{わき}差^さの通^{つう}りだ中^{ちゆう}
 身^みの村^{むら}名^な主^{しゅ}小^こ刀^{たが}の小^こ前^{まへ}の衆^{しゆう}で有^ある給^{たま}金^{かね}同^{どう}様^{さま}の者^{もの}を村^{むら}々^々の
 衆^{しゆう}から貰^{もら}つて樂^{たの}しむ暮^くして居^ゐり中^{ちゆう}身^みの則^{すなは}ち名^な主^{しゅ}で小^こ刀^{たが}の彼^か所^{ところ}
 此^こ所^{ところ}を働^{はたら}きて燕^{えん}果^{くわ}物の皮^{かわ}を剝^むたり半^{はん}紙^しを切^きたり平^{へい}生^{せい}の忙^{いそ}
 しと思^{おも}ふをするが斯^か云^いふ時^{とき}よ成^なると平^{へい}生^{せい}遊^{あそ}んで居^ゐる中^{ちゆう}身^みの

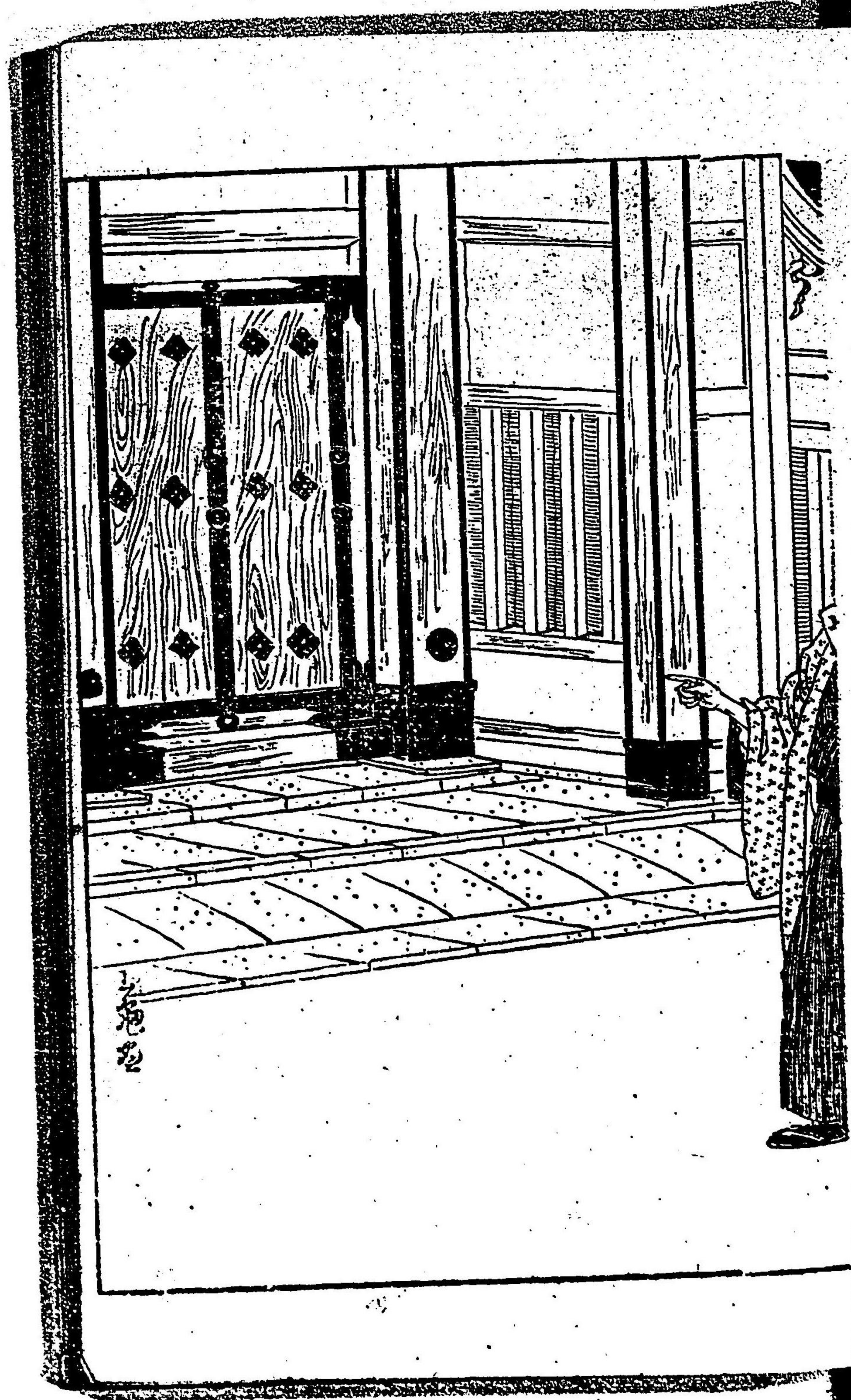
名主が身命と擲つて事件を致さんければならぬ必ず共
 此後何様なる事が有ても疑いで成らん何分も跡を顧
 むぞよと言ひ忠藏に向ひ忠藏殿御待遠で御座います……
 と忠藏の宗五郎を連れ 忠サア旦那往ませうと將門山へ
 来て見ると成程噂より最う一回りも二回りも大きな駱駝
 で只ワツく云ふ聲のみ 忠コレ 高津新田の宗吾
 さんを連れて来たから静よしろう 甲ソラ高津新田の
 旦那様が来た云ので最前からワツく と言つて居ました
 が是を聞と餘程神妙よ相成ました 乙ヤア是宗吾殿の体
 が悪いから蒲團を以て来いと言つて宗吾郎は蒲團を布き
 其上へ坐らせ名主共が其廻をグルリと取巻て一同一
 同倍宗吾殿尊公も聞ましたろうが五年間二割増の年貢で
 の小前の者の往立ませんから何したら宜敷う御座いませ

うか思案を貸してください 宗イヤ一力ならぬ話だ斯云
 事になり成らん内なら宗吾郎も致方も有ませうが斯成て仕
 舞をしての宗吾郎も手を附る譯よの往あいが併済を焚き
 大釜を備へ兵糧の容易もどをしての一揆徒黨も類するの
 で土を産ろよ致す様よ富れば後日の爲悪いから筋を消し
 大釜は村方へ持販り大勢も引取り明朝澗澤村の妙光寺へ
 年寄計り七八十名集つて相談をしたら能かろう人数が多
 くての區々よなつて相談が一決致さんから何か村々へ引
 取撥よして一揆徒黨よ陥つての成らん今宵の何か販て賃
 ふ様に忠藏殿首の衆よ何か我慢をして村方へ引取撥よし
 て腹も立ふが是が我慢が出来ない我慢をするのが本當の
 我慢だから何うか村方へ引下つて下さいましと云たが多
 人数の事有ますから名主が一々此事を小前の者よ報知

る譯も往ないから宗吾郎が何と言たか分りません「何だ
へ旨へ者だ何も宗吾殿が居るくらやア夜も日も明けぬへ
成程堪忍の成る堪忍の誰もする成らぬ堪忍するが堪忍中
で天神寐て伊坐る甲何でも宗吾殿一人居あければ日か
事れた様な者だ互ひよ一揆徒黨も陥入ての濟ぬへ宗吾
殿の旨へ者だ」と譯も分らずよ宗吾を稱賛て村々へ引下り
ました借明朝も成て妙光寺へ百何人と云ふ名主計り集て
評議よ及ぶよ云ふお話し一す一思つき升

第四席

エ一堀田様の運上と云ふ者の如何も暴で取立様が奇蹟
との先日ヤ上ましたが百姓の用る道具七十餘道悉く運上
をとり町人の用る算盤度量其他將茶盤基盤杯よの裏へ焼
印を捺し天秤一本が一匁一匁が五分印帳沼の漁師共の
是迄の運上をお取よならあかつたが此度俄に漁師共まで
運上を取上られるイヤ悉く困つて居る勿論賦税と云ふの
是の他川橋時分でも窓鏡と云ふとお取立よあり窓一箇よ
付一文宛取立る是の大變其時分よの宜い役人が有て是の
聖職の事だから止めた方が宜かろうと云ふのでお停止よ



成たが是迄の一文宛取て居ました寶非其角の句「窓鏡の昔と語る寒さ哉」と云ふ句が浮坐います神武天皇様以來武家天下でも下より賦税の納まつて居ます夫も當今の万國との交際で費用が多い今度の市區改正何と云ふのが着手して道路が擴張し誠にも有難いので茶町(磯草區)の往來の狭隘して人力や馬車で悪くすると小供や老人が輓殺されるとが數回は坐いますから誠にも危険い譯で今回道路が擴張たら其患がは坐いません只今の何處を歩いても瓦斯や電氣が點て居て犬の糞杯を踏付る氣遣いが無い誠にも有難いことで夫故下から取立よ成ますのには尤のところで中々夫で足りますまい然る柳櫻出せと言つても懐中よ一錢や二錢の有が迎も政府の爲よ手傳譯よ往來の幾許工面が罷て

も販りよ十五錢で牛鍋が怪しい位の仕義でガス只今の我々の方でも皆賦税が納ります誠には何うも有難いので番席渡世杯の古いお客様が百人遣入ると半分は無代價で百人居る様でも五十人の無代で遣入ました處路語家も賦税を納めれば木戸を拂ひかい者の此方から巡查方を依頼で世話を焼かせい様よして下さるシテ見れば賦税の却々我々共が安泰よ渡世が出来ます乃で御年貢を五ヶ年の間取ませんのが人皇十六代仁徳天皇様の時計り前後七年満三ヶ年の間年貢を廢ら取らせんと云ふの八人皇十四代仲哀天皇様が三韓を御征伐し給ふ時新羅高麗百濟今の朝鮮より交易を言つて来て如何にも蒼蠅いから三韓を討ふと云ふ手配りで有途中で崩御よ成ましたからその皇后様が征伐せんと思ひ立た處御懐怡で有が三韓を征伐せんと女

立らよ武内大臣が副將で御年三百六十四歳最少し經過と
五錢の牛鍋が食べられると云ふ年齢皇后様は我日本へ來
陣有迄出産有と勿れと弓絃を以てお腹を結ひた是五月借
の遷駕たそうでカヌ乃で三韓を御征伐し恰と三ヶ年掛り
還よ彼國を平らげて弓を持まして岩へ三韓の王の日本へ
犬ちりカンノウキウノデスとい違います乃で日本へ
御凱陣よ成まして宇佐で御誕生が有ました宇佐八幡宮と
申し上ますのが應神天皇ホンマアケの尊則是ありお腹の
中で采を取つた人皇十五代應神天皇様あり然る政府の費
用が掛るから是も仕方が無いが此時よ町人百姓が窮して
困つて居ます是に於て人皇十六代仁徳天皇様の時よ星羅
五ヶ年の間無税と云ふ其換り主上の五ヶ年の間阿ノ装束
で御所の手入が無い被服方だ政府で賦税を取らせん然

よ漸次町人百姓が富みて來て主上が同裝束を召して居ま
すのは如何も勿体ないと必有町人百姓の夜分面体を隠
し湯所の前へ俵を持って來て米を入れ呉服屋の反物を持て
來て主上へ貢物の何位有か知れん恰と五ヶ年目よ仁徳天
皇様高樓へ登つてお讀成すつたは製よ高きやに登りて見
れば煙立つ民の籠も賑いよけりシテ見ると人皇十六代仁
徳天皇様の時斗り雷今の政府へ賦税の納つて居るので然
處將門山へ屯ろしたか宗吾郎が來ました事を聞て其夜ハ
村々へ引下り翌日瀧澤村の妙光寺へ百三十五人年寄まし
た名主が集合處へ宗吾郎出て參り宗儲皆の衆斯ふ大勢
での事件が大業に成つて俺よも何も手の附様がない皆の
衆俺の申すことを聞て下されば發言をします……甲「イヤ
宗吾殿和主様の言通り兎や角言者は一人もあいな何卒宜様

よ計らつて下さり……二割増の年貢の處は免を願は
 して下さる様よ一同の者願います和主様が斯しろと
 下せへまじ一同否やは言ません宗吾郎の聞て宗然ん
 れば只今各々方へ發言を致します……是は順序を以て往
 んければ理を以て非よ陥るから先採用よは成らんが最
 城代杉山驛正其他郡中惣元締徳島勘解由など殘らず願
 を出して探用しません……乃で願書を一纏よして願て夫
 で諸ん時は村々で兩人宛人撰して出さつしやる様よ餘り
 壯くて往す六十以上でも往んから三十以上五十以下の者
 を兩人宛出す様よ……我々七人の者の肝煎名主だから思
 藏殿始め是れ往んければ成らんから……乙然んから同
 道して下さる様よ……宗就ての同勢六百人が一纏よ
 圖つて往ても餘り目立ての領主様へ取を與へる様だから

六百人が兩分れよ成て一手の市川街道一手の船橋街道此
 二街道を通行して江戸表へ着たなら各自よ旅宿を取て乃で
 朝早く辨當を所持して淺草觀世音の奥山で勢揃をして淺
 草の上屋敷へ門訴致ましても必採用よの成ません仕方が
 あいから殿様役中で有から用屋敷へ訴出耻辱を掻せ
 る様ヨヤが此處へ門訴致さんければ成らん……一所の
 見附から餘り多人數が這入ての目立から神田橋常盤橋吳
 服橋鍛冶橋と此四ヶ所の見附から成可く目立ん様に一人
 二人位宛這入り集合處の西丸下の用屋敷八ツの太鼓で
 事よ寄ると探用に成まは是非よ及んから月番の勘定
 奉行へ訴出大抵此所らで採用よ成ろうが月番の老中人
 龍訴致し夫で往んければ水戸様か宮様か先……其處いあ

送往ん内よ採用又成だろが決定して置んければ成らん
 各様の思召の如何で御座います……甲「イヤ宗吾殿の言
 處は最我々の上の事を一向に知らん者宗吾殿の能く辨へ
 て居から和主さん又委任ます……」然らんと云ので願書
 を認め宗五郎筆頭とあり千葉村忠藏灘澤村の六兵衛灘野
 村伊兵衛下勝田村重右衛門小原村半十郎高野村三郎兵衛
 此七人の者が願書を持って城代杉山彈正の屋敷へ訴出まし
 た用人が是を受取彈正へ見せました七人の者を庭へ廻せ
 と云ので七人の者の庭へ廻つて居ます内よ左右の障子を開
 いて椽側へ褥を布き其處へ杉山彈正出坐して、彈コレ何
 で今日訴出た宗恐れ乍ら夫成願書をば覽遊します様願
 ひます彈「ムーン……是の何か當年より二割増の御年貢
 を免を願ふのじやナ……其方共の訴出たのの順序が違

ふ拙者の殿様御役中で在る故十八萬石國表よ於て領主の
 代理をして居る杉山彈正で有其方共の願の趣採用する譯よ
 往ん……何故郡奉行牧尾越後方へ訴出んのぢや……宗
 御意よ御座ります二百三十四ヶ村の百姓共一同難澁を致
 して居ます夫故杉山様へ訴出ましたの何卒小前百姓の
 者を御給助下さる様願ひます……彈「イヤ其方共が牧尾
 越後方へ罷出當年より五ヶ年の間も國恩の爲二割増の年
 貢を屹度上納致すと云ふ調印したと承る……亦小前百姓
 が承知致さん者を村名主の者よ印形を出せと云法にあ
 ……宗「御意よ御座ります二百三十四ヶ村へ廻章で
 此度若君様お祝ふ付小前百姓の者よ青銅一貫文宛下し置
 れるよ付印形持参で郡奉行牧尾越後の役宅へ罷出ると云
 ふお觸面で御座いますから罷出ました處今日の上よも格

別思召が在ての御酒下されよ由て腹藏あく呑めよ無禮
だから苦敷くない呑めと云ので名主一同有難く十分よ
酒を頂戴致しました處村名主の者出精小付今日の上より
百姓の者へ褒美として百匁宛下さると云ふ誠に有難い事
と心得居内上役人が出て来て何様の事が在ても上の用
を足すと云ふ証文を上げて宜かろう何様お事が有まし
ても吃度相勉めますと云ふ証文を上げると謂れましたか
ら食酔て居ます名主共がお役人様方願て証文を認めて
貰ひ印形を出せと云ので一同食酔て居ましたので差出ま
した其跡よて証文を讀聞せるとも國恩の爲當年より五ヶ
年の間二割増の年貢吃度上納致せと云ふ文面一同の者首
驚天致し中々五ヶ年の置まして一ヶ年の所も容易お事で
の有ません是であく共百姓共は此領へ逃亡致者もあり或

の身と投げ首を振ります様お事が多く有ます様お事で何
卒二百三十四ヶ村の百姓共をお給助下さる様願度う存じ
ます………彈コレ宗吾郎村名主の印形を何と心得て居る
食酔ましたから印形致ましたと言ては上役人が其方共を
欺した様よ當る然うでは有まい………一ヶ村の名主共の印
形の大小前百姓の首も同様で有ると何と印形の容易お事
のさいぞ………首と釣換の印形で有るを食酔ましたから前
後忘却して濟か是の順序違いたが差圖を致もので無い
が其方共始小前百姓を慰然と思ふよ由て秘密よ教へて遣
るぞ………五ヶ年の處は九々多免を願うと云のは出来過て
居る二年トカ三年とか其處へ趣意を付て願んければコ
ヤア………ナト百姓の方が無理だらう………宗恐れ乍ら一
ヶ年の事よ置ましても半ヶ年よても二割増の御年貢は中

中納りませせん 彈ツマツ見れば丸たまごくは免めんを願ねがうといふのか
 宗むね御意ごいは御座ごまります……
 居ゐる此方こなたの斯か様さまな事ことは關係かんけいする身みの上うでな……願ねがひ下くだ
 げる起たてて……願ねがひ書を投なげ出してア……障さや子の内うち
 へ這は入いりタリと閉しめ引ひ込こんで仕し舞ましました 甲か宗むね吾われ殿だん足あの驚おど
 いた役やく人ひと共どもが皆みな同どう腹はらだから何なに處ところへ出でても採と用ようよの成ならん
 ……宗むねマア能よし……と云いつて杉山すぎやま彈たまご正ただの屋敷やしきを七なな人の者もの
 ……下くだり是こゝから郡ぐん中ちゆう物ぶつ元げん締じ徳とく島しま勘か解げ由ゆ郡ぐん奉ほう行ぎやう牧まき尾お越こ後ごと彼か
 方かた此方こなたへ願ねがひ出でましたが何なに處ところへ往むかへても同どうじ事こと 宗むねマア是こゝだ……
 ……サア此方こなた上うへの瀧たき澤ざい村むらの妙たご光くわう寺てらで言いつた通とほり願ねがひ書しよを一ひと懸かよし
 て江戸えど表あはへ門かど訴うえ及およぶよの斯か……するのが法はふだ」と宗むね吾われ郎らう
 ……皆みなの者ものへ教しよへました(今いまあれば免めん許もと代だい言げんが立た派はよ勤きんりま
 す)と云いふの此こゝ宗むね吾われ郎らうの肥ひ後ご國くに五ご箇か庄しやう内うち裡ら村むらの生なれで平へい家け

の落人おちひとでひ坐まいまして門かど訴うの廉れんで詮せん義ぎ殿だんしいよ由ゆて肥ひ後ご
 國くにを廿に一じつの年とし逃に亡じやう致いたして江戸えど愛あ岩いわ下した万まん年ねん山さん青せい松しょう寺てらよ伯はく父ふ
 が出家しゆけよ成なて居ゐるから途みち々々尋たづねて参まりたるが下した總そうの瀧たき澤ざい村むら
 の佛ぶつ長ちやう寺てらへ所ところ換かよ成なたので夫つまへ尋たづねて参まり厄やく介けいよ成なて居ゐ
 ます内うち木き内うちの與よ左さ工く門かどよ見み立たちて娘むすめお三さんの舞まよ相あ成なま
 して小こ供こ六む人にん出で來きて居ゐます(一ひとヶ村むらから兩ふた人にん出でて各おの々々門かど
 訴うでひ坐まいますから腰こしに竹たけ筒づつよ氷こを入いれ或あるハハシイ梅うめ
 干か鏝げんを能よく研けんぎて藪やぶ二本ふたでツル……巻まいて腰こしへ差さし吞のよの
 簀すい余よ立たハツナヨ笠がさを被かり草くさ鞋せを履はき付つけ六む百人ひゃくにんが市いち川がわ街まち
 道みち船ふね橋はし街まち道みちから江戸えど表あはへ参まります共とも下した總そうの佐さ倉くらから
 江戸えどへ十二じふに里りでがすから遺い作さくハあ木き内うちの宗むね吾われ郎らうの船ふね
 橋はしの方かたへ参まりましたが途みち上うへの百ひゃく姓せい共どもの甲か彼かりやア何なにだ
 んベユ大おほ勢せい揃そろて往むかくが……乙おつアリヤア堀ほり田たの百ひゃく姓せいだ……

甲「何處へ往だろ」 乙「何ア、江戸屋敷へ門訴をするだ
 んべ、何でもハヤ役人が悪いので佐倉は一般百姓が
 難儀してユるから大方ア門訴されて十八万石のお家も
 ハン地位も成だろ」 丙「ア、何だろ
 う……」と云、時乃で船橋街道、屋平八方へ宗吾郎の参りし
 て、樽屋五平の梓傳兵衛の會ひ、宗儲是の歸だから和
 主の阿父の五平殿の無實の罪で引廻の上在、原臺で、
 刑も成つたが時機も寄ると父上の仇が討る事も有りから
 其積りで居る様…… 傳イヤ木内の旦那様先達て、
 危るい處をお給助下され有難うは坐います…… 茲で宗
 吾は、柗屋平八方よて茶或の煙草を呑み替の衆と一緒に江
 戸表へ着ますと下谷飯田町神田淺草と思ひ、一宿を取
 り、其頃ハ馬喰町には坐いません(翌朝宿から辨當を所持

して、淺草觀世音の奥山よ於て、勢揃を致ましたが、
 六百人以上からでガ、スから奥山の茶屋の者の驚いた、茶屋甲
 何だろ、ア…… 百姓の参會か知ら…… 全乙「何ア、彼
 ヲヤア下總佐倉の堀田の領分百姓だ…… 大方門訴だろ、
 よ、甲「然か門訴だ…… 未だ見た事が無へ何事をする
 往て見様…… 是から六百人の者がツロ、
 世を通行する跡からドロ、見物が尾て来る、恰ど只今堀田
 原の處が堀田様のお上屋敷では坐います、借六百人が袋
 の糸立を布き思いく種、事ヲツ、と云、後面よの
 見物が是も大勢立て居ますから、エナヨ、
 から大變だ、皆之を見て、乾驚あし直よ、役人へ申しましたか
 ら、門外を覗いて見ますと、何かエナヨ、
 甲「ヤ、百姓を奇酷せやアがつて、運上を取て、皆役人共

が酒を食つたり女郎を買たりして百姓の咽喉を詰やアが
 る……乙「エー泥棒堀田糞役人奴……」とワツ／＼と云ふ
 如何にも見苦敷うは座います此時中島文之進が潜門を出
 て文「静まれく……」と云ふ「ワツ／＼と云ふ騒ぎ文「コレ静
 まれ此中頭取が居ろうから此處へ出る……」此中居ろ
 うから……」此時宗吾郎忠藏の兩人進出 宗「高津新田上岩
 橋村木内宗吾郎では座います……」忠「エー千葉村の忠藏
 で御座います文「コレヤイ何で其方共はお領主様よお恥
 辱を與へる何シヤ早う引せろ……」宗「此處は願書を所持
 して居ますが此度當年より五ヶ年の間二割増は年貢の一
 條で文「コレヤイ何で江戸表へ出て門訴するんだ心得違
 で有ろう取越願を致しては成らん早く國表へ飯れ……」何
 故國表へ訴出ん 宗「は憲は御座りますお國表も置まして

御城代杉山彈正様赤石丹波様其他郡中惣元締徳島勘解由
 様郡奉行牧尾越後様と彼地此地と訴出ました處お採用よ
 成ません夫故子前の者が寧ろその事江戸表へ門訴し様と申
 します夫故又七人の者の願て出ても殿様お役中で有から
 採用も成らんと止ても如何にも多人數で御覽の通り氣が
 立て居ますので江戸表へ参り門訴するを申すのを七人の
 者が止ましたが中々止りません位僅か十二里で御座いま
 すから止乍らウカ／＼七人の者も江戸表へ罷出ましたけ
 れ共何卒二割増五ヶ年の間の御年貢は免を願度う御座
 います文「コレヤイ何れ共採用に相成ろうから國表へ飯
 て御沙汰を待て……」殿「お役中で有ぞ國表へ立歸て沙汰
 を待て屹度申し付たぞ」と門内へ遣入ッちまいました宗
 ア「此處だ……」江戸役人共も同意して居るから取上り成

んキア是から國へ販る位ならフンキも出て來やア仕ねエ
是迄門訴も出て來て國表へ販る者か……義堀田泥棒堀田
……「ワッ」と悪口を言て淺草の屋敷を退きました夫よ
り神田橋常盤橋吳服橋鍛冶橋ト此四ツの見附からナラホ
ラ一人二人位宛這入纏る所の西九下の御用屋敷薄際へ六
百人の者がアイト並んだ最う徐々く時間たろうと腰に付
たる辨當をムシヤく食て居る者も有竹筒の水を呑み種ん
あ咄をゴナヨく致して居り里ヤイ斯る難儀を掛や
アがつて義堀田奴……「ワッ」と云ふ彼方此方のお屋敷
で皆武者窓から眼て見て甲何だろ……乙「ウン彼の堀
田の百性で如何も役人共が壓制を働さ是くの障で堀田
の領分在町の百性が悉く難儀だから門訴するんだが大
半地もされ老中のお役も御免み成だろ……」と彼方此方

評議を致して居る其内にハツのお太鼓ドン……
と鳴始めサアお下と云ので六百人が手ぐすね引て待居升
此時結構は門で人の出入をどいぬ制し聲が掛りはじまる
と堀田様お下りで四十八高の大名の八ツの大鼓で下る其
内にも老中のお駕籠へ付れて成らんから誰も然も道
の早う座います刻み足と云奴で誠し様やしい者で伊家
人がハイヨくと制止して居るうち今バラくと云ふ足音
がする恰ど堀田様のお役屋敷の前へ來ると一回夫リヤ
ア来たワッ……と云ふ六百人がゾルお駕籠を包み取卷
た上野様がお駕籠の内の上何シヤ……「スルトお駕
籠脇から供係領分の百姓共がお駕籠訴で伊座います
百も願ひ申します二割増のお年貢のお助下さいまし……」
ワッくと云ふ此時上野様上「悪くい百姓共……」

斬捨て仕舞へ……何ほ年齢が往きいからつて前後よ辨へ
 のあい殿様で西九下のお膝元で百姓を斬殺しての直よお
 家が潰れるよ極て居るお駕籠内で痲症で入らせられます
 から上斬捨ろく……と云ふ上意此時よ供頭一人飛で
 参り大の鞘を拂て先よ立てお願く……と云ふ百姓を胸打で
 遣た乃は百姓でがすから斬れたかと思たか百ワツと云
 て倒れる幾許氣が立ても百姓でがす大の鞘を振廻された
 から左右へ分れる機會よバツく……と云ふ門の内へ遁入まし
 た早く申すと逃込でしまつたのでヒヨリと門を閉る此時
 宗吾郎の言た通り表門の處へ六百人が一同お願ひやし
 ますく……中での殿様始め重役の方々は評議で上懸
 い百姓奴らで有る殘らず召捕て仕舞へ……見イヤ中々
 大切で坐います中よの抵抗致す者もは座いますから迂

潤よ行りましての役よ係りますから是の百姓を欺すよ
 り我方がは座いません……新様よ多人數での採用する
 往ん願書を採用遣すよ由て今宵の宿へ着き引下れと言へ
 パ殘らず退ぞいて宿を取ませうから兩町奉行よ依頼で其
 内で頭取もは坐りませうから悉く召捕てお處刑やし付た
 れは高が士百姓の事あれば震へてお國表へ逃販り鎮靜事
 では坐いませう……上ムーン……成程夫の能かろう
 ……と茲よ一決して手配よ及ぶ何でも悪い役人の言事が通
 る様での善者が一人や二人在ても必通りませんお家の置
 れで誠よ往ん者で借兒島式部と云ふ江戸家老が門の外へ
 一人出まして見コレ……其中よ頭取が居ろうから此處
 へ出る……ワツくと云て居る中より宗五郎の進出で宗
 高津新田上岩橋村木内宗五郎で坐います見宗吾郎何

故順序を以て事を致さん……宗彦意に座りますお國
 表よ於て斯様くで又此度の今日淺草の上屋敷へ御門
 訴を仕りました處國表へ立歸れと云ふ仰では坐います
 ……お國表へ殘らずお願ひやしました處お採用よ成ません
 ゆへ據處あく小前の者一同江戸表へ御門訴よ参りました
 義では座ります何卒二割増五ヶ年の間は年貢の一餘免
 を願度う存じます……見何よ致せ明朝小勢で願出る
 ……多人數での相成らん今宵の旅宿へ若き明朝小勢で罷出
 ろ其御願書を所持致様よ……ア……見苦敷い……下れ
 ……宗コレ……皆の衆採用て下さると云から静ま
 れ……是の宗五郎の差圖が有たから静つて御門前を
 引拂ひました跡の最う何だか猪の寐た跡を見た様よ義の
 毛や何かの彼地此方よ散つて居ます借此時よ宗五郎の

宗ハテナ今宵宿屋へ泊て居ると事よ寄たら堀田の方か
 ら捕方が向て召捕れて殺されての我々の大願成就致さん
 が皆の衆よ咄すと感亂するから仕方がない……と六人の
 者を連て往ふと氣が付ましたから跡六人の者を連て成
 街道白鼠屋横町小間物屋三右衛門方へ参り此三右衛門の
 房総三ヶ國へ商賣よ参り下總佐倉へも来て宗五郎方へ泊
 りまして旅賃と云つての取ません其換り米を俵で積で有り
 旨くも有まいが澤山のお香く位でお飯を喫べて下さい旅
 賃の入らんからと云ふ故に三右衛門も木内方へ泊て商賣
 を手弘よ致して居り強て旅賃と云ても三文も取ない三右
 衛門も宗吾郎始女房が江戸へ出て來ると三右衛門方へ泊
 り誠よ親戚同様よ致して居ます(夫故よ三右衛門方へ六人
 の者を連て來て右の事情を咄すと三旦那殿二階が明て

居ますからと窮屈で有ませうが二階へお隠れ成さいまし
決して知れる氣遣ひ有ません……是よ於て七人の者の三
右衛門方へ此晩泊りました此夜堀田家から兩町奉行へ之
く云ふ依頼何しろ老中の勢でがすから町奉行も謝絶
歸る往んけれども堀田の百姓が町奉行一對し抵抗した譯
でもあし益もない事だがホンの老中の頼みで人を出し
役人が壓制を働き其百姓どもが耐へて堪へて出て来て門
訴したを欺して旅宿へ泊て夫を召捕ふと云ひ如何も怒然
だから成丈逃す様……」この町奉行からの申し付で捕方
又向ふと逃す方が餘計だが堀田の方で中間足輕は町奉
行の捕方と打交つて廻町飯田町神田淺草と自身番へ掛り
まして町役人よ案内をして貰ひ宿屋の亭主も案内させ

能く寐て居處ろを突然よ用く」と云ふ皆寐惚て居る何
の事はない寐鳥を取る様で遺作もあいが町奉行の方へ逃
す方だから能く寐て居處ろを十手で頭を打つて入丁堀
用くソラ逃ろく……ソラ揮が有る逃ろくは用だ……」と十
手の先へ揮を引掛て遣り帯や何かも抱へて逃るもあり六
百人の人数の大抵逃ましたが堀田で捕へたのが二百人少
し餘で直には麻布の下屋敷へ縛つた儘送つちまいまし
た處が半が傍に坐いません二百何十人と云百姓はグル
巻よして庭の立樹へ縛めて置れますヤア百姓が斯成たら
糞燒よ相成百殺しヤアがれ糞堀田泥棒堀田奴ヤア殺せ
く……」と二百人以上で怒鳴から堪りません中間何ぞの六
尺棒或ひの木太刀を持中靜に仕ねエと此木太刀で擲り
付るぞ……」と云ふ騒ぎで然る此お下屋敷よ堀田玄蕃と云

ふ方が有まして此人の能いお方で當時の殿を抱守致し堀
田の御次男堀田加賀守記正成が御書院番で五百石取て居
た時分より勤続て居たと云ふ堀田玄蕃本年七十四才も相
成如何も役人共が壓制を働くから殿様へ諫言をしても
採用よ成ない據所なく麻布の下尾敷へ隠居同様引下り
無役で居る然處今晚ワツと云て悲鳴を上げる聲が耳へ
這入りましたから玄婆さん彼の何じや婆實の斯様
是くで領分の百姓で御座います……と聞て玄蕃屹度仕た
子玄是の大變お家よ拘る一大事で有る」と玄蕃殿の領主
へ罷出る存意を以て廿兩の金子を夜分でのいるが町の兩
替屋へ中間よ持せ廿兩を小錢と交換へ一人前二百宛中間
から家來よ持せワツと云て居る處へ玄蕃殿の玄、コ
レく小前の者解まれ堀田玄蕃で有る惡い様よ致さん

から解つて呉れ……其方共が斯様も縛れての必定生命を
取れると思ふだらうが必とも左様お事のない……國表
よ女房或ひの粹か親か何か有ろう斯様も召捕れたら生
命がない事と心得て國表での必定心配して居り一人前二
百宛遣すに由て錢を持ち今宵の内よ佐倉へ立販て呉れよ
……コレ解て遣れ……中「エお殿様からの仰せで百姓
を玄無言れ……小前の百姓を何と心得て居る咎を蒙れ
ば斯申す玄蕃切腹致し申し開きをする早く解て遣れ……
と殘らず中間に言付て繩を解き二百宛遣はし玄真妙よ
して國表へ立販れ……一同「ハイ有難うは坐います……
玄蕃様有難うは坐います……和主様が眞實の侍ひだ有難
うは坐います……何の事もない籠から出た鳥の様で皆喜
んで立歸りました借玄蕃の老人乍ら馬よ跨り鞭と當て西

村静た銀ま夫致だクせりてバ世がも
越しま二しすとしかり
長百乗のか云ホらと云入居
門ま何取のッ必戸作てす拂とを去言を諫貴公
守した十て皆でト定を閉直はらて云聞きでも
へた人籠將二息平閉直はらて云聞きでも
訴がと城門百を生ためよす上差支ん右を
出是云を山三吐積るあ野殺番のれ上
るよ者仕へ十た古お駕下のう諫ば殿して
と立様集四かし大能の城吃と云大様のを着
云宗歸とリケあて名が向の度云大様のを着
ふ吾り云是村國居が向の度云大様のを着
一郎堀ふかの表ま駕ふ時思ふ案不鐙殺りを
すの田騒騒ら者のは騒うへ會し其し吉前と返すれ
一右支然押は騒うへ會し其し吉前と返すれ
息の蕃よ出皆ざ是乗のヒの上を握す刀ば不吉前
致願江し親逃よのヨ諫支見りてで自害を致殿
し書が戸ても歸於は上野者者でり申し知言へ此
まを是以り杉在へて上手な者者でり申し知言へ此
し以り杉在へて上手な者者でり申し知言へ此
てと解屋妻したの登老中ッ故運れへ此

エー町奉行のサア逃ろと云て國表へ逃歸た者ハ二百
何十人の跡は残つた宗吾郎を始七人の往方が解りません
必定堀田の手へ囚はれ處刑な成たろうと佐倉よ於ての風
開で座いますよ由て皆の衆の爲仇敵又屋敷へ取争を仕
掛るア斯成ツの騒動よ成ましたから將門山へ屯集して
サア斯成ツの騒動よ成ましたから將門山へ屯集して
ら城代杉山彈正郡奉行牧尾越後と殘らず屋敷を打毀し城
を乗取て籠城仕様往掛の駄賃だ」と騒立て大勢押出さうと
云處へ向ふよりソツと云ふ人聲乙借の屋敷の方か

第五席

ら此方へ攻て来たかど近附を能く見と皆村方の友達故
丙「ヤアは何したマ……」甲「待て奥く願立ちやア成ぬ
エ吾人が麻布の下屋敷に縛られて奇酷奴に會て居る處を
堀田玄蕃様が御覽成すつて何か此事を穩便にして呉れ百
姓の大切な者じやと云て中間や足輕を叱つて一人前二百
宛下され騒立ぬへ様に國表へ歸つて神妙にして沙汰を待
て悪き様よの仕るいからと云から騒立ちやア成ぬエコレ
コレ宗吾殿始七人の者の何したマ「夫りやア知らんが事よ
寄ると七人の者の堀田の手へ囚はれ牢舎の苦みをして涉
座らッしやろう江戸へ往て様子を聞度が亦捕まつての大
變だから仕方が無へ武士と見たら打殺せ……」一同揃は
ぬへ遣付ろ……」と百姓が殘らず氣が立たから竹鎗銃を
持ち武士が通行ると石や何かを打付たり何かして質よ武

士たる者の迂闊よ在町を歩行けません事よ成ました借江
戸表成街道三右衛門方よ潜伏て居る七人の者の漸々様
子を聞と堀田家から町奉行へ頼んで殘らず手が廻つて召
捕れ是くだと云ので借こそ大變吾人も旅宿をして居れ
バ必堀田家へ囚はれ成たらうア、善事をした先方へ囚
れて百廿ヶ條の目安書の願書を認めましては勘定奉行伊
丹播摩守殿へ訴出る白洲が立て七人の者の白洲へ廻り
暫く経過と伊丹播摩守殿其處へ出て伊コレヤア宗吾郎
此願書よ願主の添翰が赤い添翰があければ採用する譯よ
往ん……添翰を以て訴出る是は往ん下れ
宗吾郎申し上ます吾人が此度も月番御勘定奉行へ訴出ま
もたの堀田家役人共の不屈を殘らず百廿ヶ條認め訴出

又したので大公儀へ自分達の悪事を訴られまするの添
 翰は出すまいかと心得夫故訴出ました宜敷御推察を願ひ
 ます……流石の播磨守殿も宗吾郎より一本往れました成程
 自分達の悪事を公儀の役人へ訴へられると播磨の致ませ
 ん伊一成程採用て遣すが其方共七人の者の堀田の百
 姓で有から堀田の手へ引渡すが夫の承知か何じや一同
 アツ……と云べ一言の答もあし是よ於て播磨守殿の伊
 其願書採用する譯も往ん」と訴状を投り出され宗吾郎忠誠の
 訴状を握つて堀門を出で宗儲往んコリヤア何處へ訴出
 ても是だ……堀田家から獲らず手が廻つて居るア仕方
 がない亦一工夫せざるまい」と是よ於て小問物屋三右
 衛門方へ販て来たが宗吾郎は腹の中よて宗コリヤア一
 足飛よ此廿日よ四代の將軍様か上野へは佛參の成がある

る此身の生命のさい者と心得て居から將軍様へ直訴して
 礫の刑も行はれ様と決心致し六人の者よ向ひ宗儲皆の
 衆此一條の逆も貫徹譯も往ん仮令月番の老中へ駕籠
 致した處が一且採用も成ても吾人七人の者は必堀田の手
 へ引渡されるから貫徹譯も往ん然すれは堀田の役人共が
 尙此上壓制を働くで有ろう仕方があい水戸様か宮様迄往
 りと思つたが茲の一足飛に廿日の早朝四代の將軍様が上野
 へ佛參の成があるから俺は身と忍んで直訴して堀田
 の不届を將軍様の御耳よ入る様よしあければ逆も往ん其
 換り將軍様へ直訴すれば此身の礫の刑も行はれ命はない
 心得だから然思て下さい……是よ於て一同慟としたが忠
 誠は忠イヤ宗吾殿夫やア和主様短氣だ宜くねエ和主様
 が死ふッしやるより俺の最う六十一だ其忠誠が直訴して

俺が命を捨て……宗イヤ、忠藏殿夫は入らぬ義理
 立と云者、是は様子知らんければ、迎も貫徹く、歸り往ん然
 かど云て、亦多人數で、必共往ん俺も任せ成さい宜き様
 一致すから……万人の爲も命を捨て苦難うあ、此宗吾
 郎俺も任せて下さいまし、六人の者ハアツと言た、切り何共
 忠藏始め、最う口が利けません、是は於て、万治元年十二月十
 七日、又三右衛門の着類及、ひ頭巾等を、獲らず、借面体深く頭
 巾にて、隠し御成街道三右衛門方を出で、先淺草の觀世音へ
 参詣致し、曇天で空の雪空だ、何よし、ろ年の市でガスから
 可成人も出て、宗吾郎の一生懸命よ、宗何卒吾人の思ひと
 貫徹き、ます様、万人の者を助け下さいまし、宗吾郎の一念
 の捨て、苦難う御座いませんと、懇ろよ、信心して、淺草觀世
 音を出て、りれから門跡前、から廣徳寺前より、下谷廣小路へ

出ました、たが何しろ、日の短かい、十二月十七日、宗吾郎の三枚
 橋の真中の橋の欄干よ、寄掛り、此真中の橋の、マ、下
 の傍よ、柳の木が一本在た、うで、ガスが宗吾郎直訴して、か
 ら、其柳の木を斬取たと、申し、ます、今不忍池より、落ちて、来る水
 を見て、此所の深いか、淺いか、斯して、ア、して、と工夫をして
 居た、が、何時迄も、欄干よ、寄懸て、居て、萬一堀田の者よ、見られ
 た、日よ、ア、一、大事だから、現今の、揚出の、處よ、其頃、惣茶料理
 が、在て、宗吾郎、其處へ、這入り、旨煮、刺身を、誂へ、一合の酒を、吞
 み、障子の、破れから、表を見て、斯云ふ、事よ、仕様ア、云ふ、事よ
 仕様と、目的を、付け、餘つた、旨煮を、竹の皮に、包んで、賣い、面体
 を、深く、隠し、代價を、拂つて、料理屋を出で、再び、三枚橋の中
 の、欄干よ、寄懸り、目的を、付け、橋の、マ、下りへ、來ると
 傍よ、糸立を、布き、覆い、手拭を、取り、乳香を、懐中よ、入れて、居る

言をして下さいませ。女、ハイ左様な事、決て申させ
 ん……小旦那様有難う存じます。女、是の大きき有
 難う存じます。是から宗吾郎の歸り乍ら宗ア……
 俺が直訴して處刑に成れば徳右衛門の妻も同様俺の肥後
 國五箇庄内裏村の生れ荷且も平家の落人俺が十八才の
 時よ知行の事よ就て領主と争論して遂に國表を退散して
 下總の佐倉領上岩橋村木内へ養子となり六人の小兒を擧
 げ兩人丈の片付たが宅よの總領の宗平次男源助喜八乳香
 の三之助此四人の小兒を連れて徳右衛門の女房見た様よ袖
 乞をするのの眼前で有るア……是の女房も三又離縁状
 を遣て置け此宗吾郎一人命を捨てれば妻子よ難義の
 掛るまい國迄往の危いが三又離縁状を渡して來様最早
 此世の顔の見納めた四人の小兒の顔も見たし廿日の早朝

直訴して万人の者を助け度い……と道々考へ乍ら三右衛
 門の宅へ歸れば三又離縁状を渡して來様最早
 一同「ヤア宗吾殿無寒かんべ……宗、ハイ……ハイ……
 借是々で廿日の早朝直訴致す場處を調べて來たが就ての
 俺の一度國へ歸り女房も三又離縁状を渡して來度い然で
 ないとも木内の家に拘る俺の御存の通り智で有し先祖
 の家名を潰して濟ません日も掛らあいから何卒暇を下
 さる様よ……六人の者の顔見合せア……此位英雄豪傑
 の宗吾殿でも妻子よの心を奪はれる者か……忠イヤ宗
 吾殿危い事だから何か堀田の家來共よ見附らない様にし
 て往て下さい宗、夫の心得て居ますと翌る十八日早朝三
 右衛門が田舎へ商賣に出ます通りナリサの半股引目倉織
 の脚絆を穿き着物の上よ十の字飛白の風合羽を着其上へ

モヨリ(嗣卷の功老経た様る者)も小さな算盤も辨當箱を太
い眞田で中を結い頭巾で面体を深く隠し裏も小の字も三
の字の書て有る管の三度の笠を被り道中差を差し御成街
道を出たが日が暮なれば佐倉への道入れませんから道
中の成可くユツマリく歩行き恰ど逆井へ参りますとナ
ラく雪が催して参りました船塀へ来た時分の彼は日か
短かいから七ツ半廻つた頃よの大雪も成て来て柵屋平八
方へ立寄り樽屋五平の俣傳兵衛よ會ひ宗倍傳兵衛殿俺
の是々斯様で此度宅へ往くが夜の引明よ和主の處へ寄
るから仕度をして待てお出で江戸表へ同道して往き事よ
寄ると和主の親父さんの仇敵も取れ様から其積りでお出
で傳ア一有難うは坐います必ず貴郎様は御苦等成すつ
ては坐いませう……是よ於て茶を呑み一寸内々では飯

を喫べ夫より小金ヶ原から大和田へ掛り眞直も往けば佐
倉の城下へ出るが迎も城下へ這入る譯も往ませんから大
和田より左へ曲る百姓達の通行る道が有る宗吾郎の其道
より参りますと茅田村其先よ神崎村平戸橋村是から吉高
の渡舟よ掛る(大和田ヨリ吉高の渡舟迄三里半)其吉高の渡
守が甚兵衛で彼是夜の四ツ前雪のシンくと濁を卷て降
て居り雪吹雪がヒツくと云て襟へ吹込み雪明りで彼方
此方が能く見へるが一人一人も通行りません恰ど甚兵衛が
小屋の内を圍爐利へ粗朶を燻べ乍ら獨言甚ア……彼
な神か佛を見た様も木内の旦那宗吾殿の堀田の手へ四の
れ半舎の苦みをして坐らしやるが天道様の何處を照
して居るのか俺の不動様を信心するけれ共木内の旦那様
の未だよ知ねへと言の不動何てエ者の動かず動せずと

宇よ書てエが信心もへツマクレモ入らぬエや旦那様の安
否一知れあければ不動の掛地を寸断くよ引裂いて焼て
仕舞う必定細君や小兒衆も今に親父さんが飯るだろうと
心配して傍坐らッしやろう夫よ先年旦那様のお蔭で命が
助り三年跡又婆アハ亡かり俺が生中よ生て居る丈旦那の
事を考へて見ると夜るもろくく眠られぬへ……と歎い
て居ます折門の戸をトック
宗甚兵衛殿
だく……夜の船の出ぬエよ……六ッ限りだ宗イヤ甚兵
衛殿俺だく一寸此處を開て下さいまし甚誰だ……
宗一寸此處を開て下さい宗吾郎だよ……甚兵衛は團
利の傍を立上り門口の戸が氷付て居るのを無利やりよば
りく……と開る宗甚兵衛殿俺だ……甚ヤア……貴郎の
木内の旦那様……家よ何人も居ませんから此方へ還入

らッしやい……と云乍ら甚兵衛は門口の戸を手早く閉め
宗吾郎がス濡よ成て居る笠を取り頭巾を被つた儂草鞋を
穿た徳團利の中へ兩足を入れ甚兵衛の粗朶を煉乍ら
甚木内の旦那様貴郎様の掘田の手へ囚われよ成たと聞
したたが宜くマア貴郎の助つて健康で此處へ移座らッしや
いました何うしてマア……旦那様宗イヤ今門口で和主
が言事を俺は開て居ました俺の事を共様よ思て下され甚
兵衛殿仇みの思ひません……甚イヤ和主様の御恩の
れません……然して和主さんの是か何邊へ宗イヤ
は是れ一目で他隠れて居ました甚兵衛殿船を出しての
らよ一目會ふ歸て来たが何か甚兵衛殿船を以て七人の
いませんか甚旦那様の印幡を召の喜兵衛が郡奉行牧尾越
より刀を拜領し且探の役を付り捕縄を以て七人の
が此の倉六ツを歸て来喜兵衛が遣て來て船の鎖を解いて
ます夫六ツを歸て来喜兵衛が遣て來て船の鎖を解いて



親不孝でげす然らば虚言を吐きますすケレども親孝行を致したいも
 の夫婦の中でも虚言を吐きますすケレども親孝行を致したいも
 と云ふのは是が本統では座います古歌「斯ばかりいつは
 り多き世の中よ子の可愛さの誠ありけり我子の可愛と首
 ふのは是の成る程眞實では座いませう焼野の雉子夜の鶴
 禽獸でさへも吾が子を愛しますすから況して萬物の靈たる

人間が吾が子を可愛と云ふ是が本統では座います
 故に百姓の龜鑑と言いました宗吾郎宗傑の人だが我子よ
 心を奪はれますすから危険火の中よ遁入た様ナ事ではすお
 万治元年十二月十八日で座います我子よ訣別を告げ女
 房おさんよ離縁状を渡し四人の子供等の顔を見様と云ふ
 ので江戸表から佐倉よ歸りましたので吉高の波守の甚
 兵衛よ還ました此の甚兵衛の去年宗五郎の爲よ助命られ
 て居りますすから性命を犠牲よ掛て宗五郎を家よ送らうと
 云ふので早くやさば關所やぶりで座りますす印幡沼の喜
 平と云ふ者が牧尾越後殿より刀を拜願して十手捕縄を持
 て晝夜の別なく木内宗五郎千葉村の忠藏等が必然此の佐
 倉へ歸て来るだらう歸つたら捕獲へ様と云ふので暮れ六
 ツが成ると船よ封印を附け錠を卸して日が暮たら一人一人

たりとも渡してはならんと盼附て有りませす翌朝に成ると
 封印を取り鍵を持って参つて錠を開ると云ふのでげすから
 殿重だけれども此船を出して呉れませんければ宗五郎の
 妻子は遣う事が出来ません佐倉の御城下の印幡沼でぐる
 りと圍繞て居りますから是を渡りませんと何うしても佐
 倉の城下は遣入ません印幡沼の縦十八里横の廣い處も有
 れば狭い處も有るが其處を甚兵衛の宗吾郎も恩返しをせ
 んど錠を以て浪防の杭に鑿が打て有りりれは鉄の鎖を通
 して錠が仰りて封印が附て有ますそれを甚兵衛の錠で波
 防の杭を打ち切りまして錠と鎖と杭も着た儘船に入れて
 甚旦那様サア御乗ささい……此處で宗五郎を船に乗せ
 て印幡沼の向ふの岸に船を附ました。甚旦那様御後くり
 と遣て入らつしやい。宗駐兵衛寒むからふが何か待て居

て下さい。甚イヤ暑い寒いハ厭ひません尋公ハ二百三十
 四ヶ村萬人の者を助け様と云ふ御氣性……ナニニ尋公冷
 たいも暑も御座いません……私の着て居る襦を着て御出
 であせい此被つて居る笠を被つて入らつしやいと云ふか
 ら甚兵衛の着て居りまする襦は竹の子笠を被りまして酒
 水の裏手は出ます是より下岩橋から上岩橋村の自分の宅
 へ歸らうと云ふは十四五町も有ます恰度最明寺の亥の
 刻の十時の鐘がボーンと耳に遣入ります。宗今十鐘
 だナ……雪をサクサクとふみ分て雪吹が懐ろよ遣入ので
 身体ハ摘切られる様お冷る雪光で能く見えますが人の一
 人も居りません見附ましてハ一大事では坐いますから前
 后も氣を配りながら。宗嗚呼哀れナ……城附六万石の田
 畠ハ其儘荒果て昔しの真田も今ハ道も成つて居ると云ふ

……案々子の此通り倒れて居る菊入れ前も成れば案々子の人の百人前も働くの菊込が済んで仕舞へば案々子の抜かれて染て火も焚れると云ふ人の世や古き案々子の火よ焚れ下眠僧都の歌よ山田守る僧都の身こそ悲しけれ秋果ぬれば訪人もあしア、皆お國の家來の悪い故町人百姓が塗炭の苦しみをする思へば、領主の家來の憎い奴じや……と道を急いで前後も氣を附あがら下岩橋村も最早通り越して上岩橋村の自分の宅への半町手りで……戸の問隙から致して遠見燈火が見えます 宗子供等は寐たうが女房お三の……最寐床も就たかと前後も氣を附ました自分の家でも自由も遣入れん様に成て居ります 背戸口から致して宗五郎のぞいて見ますと妻のお三の二才もなる(三之助)乳飲を懐み入れ糸車を探つて居ります十一

なる宗平の九才の源助も大學を教へて居ます 團爐の向ひも七才もある喜六のく、り枕をいたしかい窓を若て寝ております 宗親母さん……阿父ちやまの何時帰りますね 三此の秋から國元の騒動皆の衆と江戸へ出でよあつたが堀田の手へ捕られなり半舎の苦しみをしては座らつしやるか夫共今よかかいらりならうか……源慈母さん……阿父さんの伊土産よ半紙と筆を買ふて来て下さらうや 三源助や阿兄さんが能く教へて呉れたから大學と能く覺えてお置よ乃父さんがは歸んなすつて其前で大學を如流讀と何の位は喜びあさるか知れあいから……サア、催眠成つたら前へ伊休みよ「ブーン」糸車を取つて居り升良人宗五郎の事を考へてハ潸然涙を翻ぼして居ります 裏口をドンクク 叩音 宗お三やく

余り雪の降り様が劇しう座りまして、突交りて御座いますからサアサツ、と云ふので直に聞えせん様でげすから、宗(聲)を少し高め、三や、三、オヤ、今の御座の旦那様の御聲……乳児を懐に入れて立出ますと、源慈母さんく殿父さんが御歸り……三、叱、静かよおし、と三の履物を穿きまして裏口の氷つて居るからガラ、と明けると、義を着て笠を被つて居る、宗、お三や、三、オヤ、オヤ、旦那様「ア」と云つてお三の臂餅を搦く人よ見附けられて成らんからと云ふので裏口を能く見て早速裏を締め女房お三が手を取りまして上へ引き上げて宗五郎の鞋を穿た徳田様の中、に雨足を入れますお三の長人の姿を見せて、一大串で御座いますと思ひ直、屏風を持って來て屏風で圍つて置ます、宗平「殿父さん御歸んあさいまし、宗、オ、源殿父

さん……御土産を下さい殿父さん、と云ふので、三、是、柔順しくおしヨ、一段、聲を低め、ヒョ、として聞へると、大邊だから、宗源助宗平柔順うおしヨ、今、又阿父さんが御芽出度此地へ歸る時よ、御土産を澤山進るから……三、旦那様尊公の何方よ御出でささいました、宗、イヤ、扱てお三、お前の心配して、有らうが俺の御成街道白鼠屋の横丁の小間物屋三右衛門方よ七人圍のれて居たが何よ致せ、巴の當家の駒馬である方一として家よ拘はる事があつて、伊先祖よ濟まんから……りれ故、火の中よ飛込、心様お思ひをして是迄参つて其方よ去り状を……渡して置さへすれば妻子等よ崇りも有まい此木内の家よも疵が附まい、か、ら、お、前、の、處、へ、離、縁、狀、を、渡、し、よ、参、つ、た、の、だ、必、ず、と、も、後、々、の、事、の、何、分、と、も、頼、み、ま、す、う、娘、二、人、の、他、家、よ、嫁、よ、参、つ、て、居、る

から別よ心配は無いから……」と懐中より致して兼て書て
参りましたる三行半を出して女房も三も出すとおさんの
是を寸断々々分裂して燃して居ります鹿菜の中も放り
込みました三旦那様へお前さんの何う云ふ思召しで尊
公の佐倉にお歸りでは座いますか尊公の素より万人の人
の爲に性命を棄様と云ふ思召しでのに坐いませんか又尊
公が若しもの事でも有りませすれば假令伊崇のあいよもせ
よ夫婦の情で妾が余所るがら見て居られますか……何ぞ
は願だから此様お穢らひしい物を渡して下さるナ……
公が万一もの事が有れば夫婦の二世と言ますから妾の此
の世も居らん積りで座います假令木内の家名も疵が附
ましても伊先祖の怒り遊ばしますまい尊公の二百三十
四箇村の總代と成つて萬人の人を助け様と云ふ思召しで

ありませうが是から尊公の……何うござるお積りで……
宗左ればお三二十日の早朝四代の君が上野よ成りが
有るから其時直訴する積り然すれば言はずと知れた上様
よ直訴すれば穢の刑も行はれると云ふの宗五郎兼て承知
して居るうれ故よ宗五郎の性命を犠牲に掛てあるのだが
木ノ内の家も疵を附まいと云ふ量見で歸つたがお前がさ
う云ふ所存あらば離縁状は渡すまいから……三何よ致
してもし旦那様人に見咎められまい中よ早く帰なすつて
下さい宗ア心得ました……噫宗五郎面目次第も無い
……男も及ばんお前の量見然ら……三ア、若し三之
助の誕生で主神様よ献たは神酒何うぞ伊願だから一口
飲で歸つて下さいあさんの立上りまして徳利を取り出し
自在よ掛ては座いまする鍋の中よ入れ早速に伊烟を附け

湯呑を出して「三ッア是れを……」と云ふ宗吾郎ハ三之助
 の誕生も忘れる位で此酒をグーッと飲み 宗おさんじや
 最早立歸るから「圍爐の向ふゝ寝て居りました七歳も成る
 喜六天窓を扛げまして 喜オヤ父様帰る……」と跳起き
 まして嬉しませられ又親父宗吾郎又擁抱附く 喜父様今夜
 から私を抱て寐て下さいまし「懐ろゝ手を入れまする……」
 三の懐ろゝ抱かれて寝て居りました三之助も虫が知らず
 か泣き出します此時又宗吾郎は耐りません 宗鳴呼頭ん
 だ事を仕出した……酔狂するのので無い二百三十四箇
 村の万人の蒼生の爲に命を犠牲にするのだが子供等が是
 程慕つて呉るのを之を見捨て往くのも余り親子の情愛が無
 い「此時の断念で止さうかとは思ひました」が女房お三又言
 はれた事も有ると 宗「ア何うぞ喜六や兄弟柔順くせよ

乃父は最早往ぞ 三ッモウ帰るか……尋公何うぞ
 願で座いますから此の子を鳥渡抱て遣て下さいと懐
 ろゝ抱て居つた三之助を宗吾郎に渡す 宗「最早我が子の
 顔の見終め抱き終めと自分の頬を三之助の頬に押附けて
 子供等の顔の見終めと三ッ子供を渡し宗五郎の鏡を引
 掛けまして士間又下りる三人の子供等の父様「く」と云ふ
 て取り絶る女房お三の 三ッ静かよ仕よ聞えると往あ
 いから……旦那様早く此處を立去つて下さい見附つて
 の成りませんから 宗オ、心得ました」と宗五郎の裏口か
 ら出ますとおさん冷めたいも何れも知りません子供等
 の宗五郎の後ろ姿を見て泣き出す宗五郎の後へト足先
 へト足雪吹で坐いますから笠で面体を隠しましたたが
 人の一人も居りません後姿を見送つて居る中又早や宗五

郎の姿が見えなくありました裏口を締めたも三の子供等の手前もあれバ手拭を口に入れてましてハア一ツと斗りよ泣き出した是の溜涙です是が最う一生の溜め涙です……

初宗五郎の道を急で渡船場よ來ると何の事か無い甚兵衛の白鷺の様に成て居る何うも天窓も身体も皆雪です宗

甚兵衛どんく 甚旦那様大層早う御座いました宗

否些と手間取りました 甚善い鹽梅では座いますサ、伊

乗んあさいまし是から宗五郎の船よ乗ります甚兵衛様を突立て彼方の岸よ船を着けました 甚旦那様御危のふ御座います御滑んあさらない様よ……宗五郎の船より上る

甚兵衛も同じく櫓を擔いで陸よ上りました 甚旦那様

様是から大和田よ出る迄道を注意なすつて下さい 宗甚

兵衛是の種々御世話も成つた……是の少いが船賃だから

甚何致しまして尊公様から金子を頂いての勿体ない是の頂いても頂かなくても同じ事 宗輕少でも有らうが何か取て置いて下さい 甚旦那様最う甚兵衛も五十年の坂を越えて居ります……尊公よ何か御恩返しを仕なればあらないと思つた處……御覽の通り私の關所破りと同様で御座います明日の朝迄よ此芳高を逃亡を致すか一ツ間違へバ印籠沼よ飛込んで私の死に積りで御座います 宗甚兵衛どん其位迄よ俺を思つて下さるか忝けあい 甚早く入らつしやい 宗うんあら甚兵衛どん随分壯健で……

甚ハア……宗五郎の道よ注意けて芳高の渡しから大和田の宿よ出るのが三里半で御座います甚兵衛の宗五郎の立去る後姿を見て自分の小屋の門を締めました宗五郎の半町計り來ると先方から簀よ笠を被ぶり何か杖を拵て替

をザク／＼踏み分て参る者が有りませ見附りまして一
大事と道巾は僅と一問か九尺三寸りでは坐いませから成り
丈け知れなない様よ一方の方よ除けまして恰度向ふから來
た人と交替よ成りましたが男其處へ往の誰だ「ヒヨッ
と聲を聞と印幡沼の喜平急よ逃る譯よの往ません道を急
いで此方よ來ると喜待て／＼と早くも後を返断て参り
ます宗五郎は十字飛白の風合羽を着て居りましたから怪
しき奴だと駈て参つて喜待て／＼待やアがれ……ユイ
和郎ア宗五郎だナ此ヤイ手前達が此處へ來るだらうと乃
公の二六時中新うして東北西南巡廻てる……ア役所へ
歩べ宗イヤ喜平どん何うぞ見遣がして下さい……俺一
人の身体でい無い二百三十四ヶ村の者の爲よ性命を犠牲
に供る宗五郎……喜平どん何ぞ見遣して下さい 喜イヤ

成らねエ……直尋常よ役所へ往きねエ……牧尾越後様か
ら長刀拜領して十手縛繩迄下つて居る此喜平見遣がす事
はあらねエ……サア往け 宗何ぞ見遣してと云ふ宗五郎
又嘴り附きました宗五郎は振り放みして逃げ様としたが
喜平は大力の男で中々放れません其中よ宗五郎を捨ち伏
せました 宗喜平どん堪忍して下さい 喜ア、仕舞つた
……生憎細繩の袋を何處かへ落した……オーイヤ甚兵衛手
を貸して呉れ甚兵衛—手を貸して呉れ宗五郎の今跳り起
きやうと云ふ喜平の抑へつけて居ります中々一人では座
いませから宗五郎よ繩を掛け様と思つても細繩の袋を落
し仕方が無いから宗五郎を引よせて 喜甚兵衛—手を貸
して呉れエ……甚兵衛—くど云ふ甚兵衛のヒヨイと
是が風の傳え耳よ遣入りましたから門をガツリと開て何

事かど雪明りで見ると何か半町平り向ふよ取り込んで居る容子だ 甚「ナンだアー 喜甚兵衛！……手を貸して呉れ宗五郎を生捕た役所へ連れて往やア褒美の留み次第……」半分遣るから手を貸して呉れ 甚「ア大變だ旦那様、喜平よ掴まつた様子」と此方よ在ります刺刀を提て甚兵衛出て参りました 甚「何が喜平どんたい 喜オ、能く来て呉た役所よ連れて往やア望み次第褒美が出る半分遣るから……」宗五郎を縛るのだが捕縄を何處かへ落しちまつた 其「ハア宜しうがす……喜平どん上よ居るのか宗五郎の下よ居るのか 喜上だ上よ居るのが喜平だ館く見る己の面ア見ると被ぶつて居る笠を取る甚兵衛の喜平の頭巾を取りまして 甚「下よ押伏つて居るのが宗五郎か 喜甚兵衛己の面ア解つたらうナ 甚「下よ居るのが宗五郎上よ乗て居る

のが喜平どんか……心得たと刺刀を持まして上よ居る喜平の眉間の處をメデアリと擲つた咄と言つて倒れる處を宗五郎は手早く跳ね起まして腰よ帯て居ります脇差を抜いて喜平の肋骨よメプーリ突き通して 宗「甚兵衛どん……此處で助つた……ア、一忝けあい 甚「旦那様後捕はずよ……此野郎の私が量見が有りますから 宗「何分共よ願ひます」夜に早や明ける斗り血を拭ふ暇も何よもは座いませんから其儘よ元の鞘よ納め道を急いで大和田から致して恰度船橋よ至つたのの彼れ是れ夜の七ッ半と云ふ時分です併屋平八方よ居る樽屋五平の神傳兵衛よ往く時分面會て居りますから早速戸を開ると 傳「ヤア木ノ内の旦那様で…… 宗「ヤア傳兵衛殿支度が出来たら於前の亡父さんの敵も取れるから俺と一緒よ江戸表へ出せと云ふ

ので茲よ宗吾郎は傳兵衛を連れて伊成街道白根横町小間物
屋三右衛門方よ難おく立歸りました是が萬治元年十二月
十九日の朝では坐ります乃で二十日より四代の君が上野
佛參り出でるさる其四代の公方様の御籠のお側よ
直訴致さうと云ふお話し鳥渡一と息つきました

第七席

エ、三右衛門方へ残つて居ります六人の者の宗五郎の姿
と見てホッと息を續きまして宗五郎が堀田の手へ扱はれ
よあれば大變だしゆびよく戻たので喜びました小間物屋
三右衛門傳兵衛ともよ八人で十九日の晩水盃をいたして
今生の別れで御座ますから恰度十九日の日が暮ましてか
ら是から宗五郎夕食を致して腹内を充分に持へ百廿ヶ條
の願書を一緒致して御勘定伊丹播磨守様へ所へ出まし
た願書を一緒致して家根板のあひだへはさみ一まい糸で
結え西の内紙の名を包みまして「上」の字を書て乃で青竹を

三尺五寸と云ふ是が願書を挟みまする法ださうです宗五郎其處等の邊の心得て居りますから充分準備を致し最早十九日も暮方相成りますから先づ夜中忍んで参らんければ容易三枚橋の橋の處へ来る事が出来ません宗五郎願書を懐中に入まして扱て日が暮る夜八時前御成街道を出ましたのが御成の前日で御座いますから通ヤラポン金棒で町々を巡つて居りますから容易通れません况して御成街道の御屋敷での窓板を下して目張りをして致してあります誠と嚴重で御座升て煙止めと云ふわけ實と大邊も噪ぎです夫から思ますと當今の誠と御手輕と成りましたれ天子様の行幸も吾々の様か者が立て拜見ます從前天子様の龍顔を拜すと目が潰れたと申します

ます處が徳川様の御成の殊の外御手重で御坐います是の三代將軍様から御手重と成りました二代將軍秀忠公迄の誠と御手輕で今日思ひ附て今日御成りも成る事であります一夜位の御成り先きと御泊りもある事が有りましたが是の二代様迄です三代の君に成りまして御手重と成りました今四代の君の御佛参で座います是の徳川様代々の内と僅た御一方です十二月二十日の佛参と云ふの前後の公方様より有りません三代將軍家光公の慶安四年四月二十日御年四十八歳よては他界其父上の御歳暮の佛参だから十二月二十日です是を宗五郎存じて居るから御成街道を彼方へ隠れ此方へ隠れ自身番の前を見ると役提灯がズーイと列べて仕事師と町役人が彼方此方を廻つて居る僅との事で三枚橋も参ります兼て探知べて有ります

る三枚橋の中の橋で座います橋を渡ると左方より大
きな柳が有たさうです宗五郎が直訴してから柳の切たと
言います(中よりの伊勢廟だと申しますが伊勢廟での中
と黒門を這入った日よりの何の位失身人が出来るか知
れませんが宗五郎の何方より上様も近付さへすれば宜
しいので五郎の柳の三枚橋の中央で申し上ります(切宗
五郎の彼地此地を見るに寂寞として只金棒の音より耳
に這入るそこ人から来れば石垣に撞まつて川の中より
這入る何より恐ろから落ちて来る氷たから其様も深い
處での座いせん橋の下より細繩を巨して是へ先づ宗五
郎足を掛まして橋の裏より這入る居りましたがうれで
の草臥れますから下りて石垣を這上つて柳の後より隠
れて居ります段々夜も更巨つて参ります最早九ツ半
八ツ半七ツで今より伊勢拂ひが来

るだらうと姿を隠して容子合を見て居る中よりの
徒士衆御小人衆が御拂ひくく云ふ聲が宗五郎の耳
に這入る其中は橋町くで犬が頻りよ吠えて居ります
て御拂ひが仕舞と上様が御近づきよ成る従つて
ッく云ふ聲の聲が聞えます扱て今日御供の面
々は御老中松平伊豆守様(是は御供とはどなへませ
ん御誘ひと稱へます若年寄から致して御供と稱へる
さうで伊勢坐います若年寄牧野越中守殿大目付が
高木伊勢守目付我々権之助は勘定奉行村越長門守
其の外御供の面々綺羅星の如し乃で警驛の聲諸共
又廣小路から橋よ掛つて伊勢出でさる宗五郎は石
垣からソーンと姿を隠して見て居ります御駕籠の
前立ますのが御辱坊衆が一人是は上が縮鬘斗目で
其上が麻上下股立を取りまして帯刀で御坐い

ます何しろ稗々しい者上様の御籠の廻りは然るべき旗
 本衆が嚴重に警固て居ります今日は伊弉籠で伊佛參の
 成では坐います恰度間近くあると足音がバクバク
 ヲイシイバクバクと云ふ何も公方様の威光と云ふ者の大
 邊です此聲が掛ると横町々々で犬の吠聲も止まる様
 けで有りませ宗五郎容子を見て居る中に早や三枚橋の上
 へバクバクバクバク伊伴の面々が掛つて來た宗締た懐中
 用意致して居ます願書を三尺五寸の青竹の頭よスツかり
 結附て見て居中又恰度上様の伊乗物が橋の上をば通
 て彼れ是れは駕籠が八間も往た處で柳の後から宗の願
 の者では坐い升と飛出たは供の面々驚いた河童の懸懸が
 出たと思ましたらう宗下總國佐倉領万人の百姓と御助
 下さいまし堀田の領分の者を伊助下さいと早は駕籠の許

又至ます御駕籠から八間離れて直訴するのが是か御駕籠
 訴の法だと申します乃で飛び出しましたるから御駕籠の
 側を取締つて居ります松平善兵衛と云ふ方が大力で御
 座います是が松無禮者と突然胸を突きましたから宗五
 郎飄眼々々よよろめき仰向又倒れましたたけれども左様
 事で驚く者であるし素より性命を棄るのハ覺悟の上で御座
 います仰向又倒れる程突れたから元結が切れて散乱髪
 相成り宗五郎陰限けながら立上り宗何ぞ御取上げを願
 ひます万人の命を御助け下さい何ぞ御取上げを御願ひで
 御座るくと又々御駕籠の許に参りましたから二度目
 も亦前の人が飛んで出て同じく右の手を握へてくる
 と引き廻し善無禮者……と推致して遣りましたから宗
 五郎ズーン動と横に倒れまして右の頬を摺り剝した其時

よ食切つたものと見えて唇から血が淋漓と流れる鞋の跡
 の坪も同じく切れましたから鞋の後ろよ引摺り最早宗五
 郎立上りましたが狐跟々々踏跟けあがら 宗佐倉の百姓
 堀田の百姓何ぞ命を御助け下さいましと云ふ此時最早黒
 門へ半町斗りに上様の御乗物が参ります時よ四代の上
 様家綱乗物を止め……伊豆の居らんか……伊豆々々
 と云ふ御駕籠の中から御聲が掛る此時御老中松平伊豆守
 殿御駕籠の側よ馳せ付けて大地よ兩手を突きまして松
 ハ、ア 四代伊豆……何事である 松堀田の百姓下総佐
 倉の百姓万人の者を御助け下さいと恐れ入りますか上様
 へ御直訴で…… 四代直訴憫然である取り上げて遣らせ
 ……其方よ任するぞと被仰つて直よ御乗物が黒門の中へ
 御這入りよ相成る宗五郎の此様よ成つて(兩手を捻り上げ

らる、体打伏せられて居りましたが今伊豆々々と云ふは
 言葉が有つて微かよ伊豆其方よ任せるぞと被仰たのが宗
 五郎よ聞えたから 宗叔の願も貰いたわい智恵伊豆と申
 し上げる伊老中よ任せよ相成たり……伊豆守様のは裁
 決おれば假令此の宗五郎の死しても二百三十四箇村の者
 が助かる事か……ヤ嬉しいとホット息を續きまして直よ
 捕縛されて黒門町の自身番よ伊預けよ成りました扱て伊
 下城よ成つてから勘定奉行村越長門守殿へは預けで
 坐います斯なれば大目付は目付の伊兩名堀田家へ乗込
 役は免の上謹慎を申し付け全で閉門同様で伊坐いますか
 ら是で十八万石が半地よ成るか形なしよ潰れるか解り
 ません早速明れば二十一日よ村越長門守殿が段々宗五郎
 を職べると以ての外堀田の家來が悪い是れを伊老中伊豆守

(紙双倉佐産土總下)

申し上げたから伊豆様も殊の外立腹で伊坐います
けれど十二月二十日の切迫の事故(十二月の十日で上も
色々取込が有るから)一昨夜明まして正月も経ち二月
も相成りましてから大公儀よりして堀田家の國の家來を
一々名前附よして呼出します城代七千五百石杉山正其
次赤石丹波其次が笠原治兵衛坂上倉太郡中總元緒徳島
藩解山郡奉行牧尾越後町奉行田中惣左衛門岡村幸造環と
云ふ者を名前附で此者等を國許より呼寄せ居る様……
致したれば役屋敷迄訴へ罷出べき者也云ふので扱て堀
田様で大公儀よりの書付の名前通りと一々十二名で有
るから江戸屋敷より呼び寄せ扱て斯う成つて見ると悪黨原
も一同と薄氷を履んで居る様です薄氷の上も居る思ひ
だが是の最う仕方が無い江戸屋敷へ到着し成りましたか

(紙双倉佐産土總下)

此段を伊豆様も申し上ると万曆二年二月二十二日江戸
家老小島式部留守居一人附添えて杉山正始め十二名の
者役屋敷より罷り出ますりれで町から呼び込まれました
者の宗五郎村越長門守と御預り成つて居るから是も御付
では白洲も出ますりこで引續いて千葉村の忠藏灘澤村の
六兵衛瀧野村の伊兵衛下勝田村の重右衛門小原村の半十
郎高野村の三郎兵衛其後へ續いて出たの梅屋五兵衛の
伴傳兵衛其後續いて七人の者を庇蔭しました小間物屋三
右衛門是丈けは白洲も出ます評定口の方から堀田の家來
懐中物を残らず改めまして家老も留守居引續いて十人の
者評定口から出ます今日係りとして松平伊豆守御株の
上もは着座も相成るそこで伊大老酒井雅樂頭様りの外諸
役人が打ち揃ひまして最初宗五郎を伊豆守様は願へる

伊豆様は是を聞た堀田の家來戰々保へて居ると云ふ是から
伊豆様が御裁決よ座りまするが先づ今日のは是丈け

第八席

エイ宗吾郎松平伊豆守様の係りと相成り扱こり二百三
十四ヶ村の者安泰よ相成扱ての難有い事と喜んで勘定
奉行村越長門の守殿よ預けと相成り申しました最早十二月
二十日の事で歳迫つて居りまして上もは用繁多では坐い
ますからりれ故年を越し勿論下調べ有り申しましたらうが
万治二年二月二日総残らず呼出しと相成り申しました
勿論堀田家の大目附高木伊勢守は目附會我權之助の
名が乗込よ相成り御役御免の上謹愼を申し附つて全
閉門の様よ相成て居ります上から致して佐倉の國許へ

名前附けで江戸屋敷よ呼び寄て伊豆守様の御調へ相成
 る實に國許の役人共も薄氷を履みまする様ナ心地でけす
 が上より致して名前附けで居坐いますから城代杉山彈正
 始殘らず江戸屋敷よ参らんければ相成りません江戸若
 り相成ると御用屋敷よ着参届に相成ります万治二年二月
 二日殘らず龍の口御用屋敷よ呼び出されます先づ今日が
 評定と相成りました堀田家から致して江戸家老小島式部
 留守居松澤半人兩人附添ひまして龍の口の御役屋敷よ罷
 り出ます先づ堀田の國家老杉山彈正赤石丹波郡中惣元締
 徳島勘解由笠原治兵衛郡方奉行牧尾越後同じく郡奉行中
 村外記町奉行田中惣左衛門の側は用岡村幸藏エイ評定口
 より致して懐中と殘らず改め兩人附添ふて御用屋敷よ罷り
 出る村越長門守より致して罪人木内宗吾郎エイ繩附で出

る引續いて千葉村の忠藏流野村の伊兵衛勝田村の重右衛
 門小原村の半十郎高野村の三郎兵衛瀧澤村の六郎兵衛
 成街道小間物屋三右衛門樽屋五平伴傳兵衛町役人附添ひ
 で砂利の上よ罷出でます今日龍の口の御評定所へ出役
 の御役人の御大老酒井雅樂頭様エイは老中稻葉美濃守若
 年寄久世大和守引續いて松平伊豆守殿是は係り御
 座います御用箱を御控いさされて其處よ居若座に相成る
 右と左は目安方よ公用方伊豆守様の後には刀番エリ
 致す紫縮緬の服紗よは刀を包みうれを持って控いて居りま
 す實に涼々しい者で凄然と致して居ります「最初宗吾郎よ
 御問よ相成ります伊宗吾郎宗吾郎頭を上げろ頭を上げ
 ろ」扱て此處でがすて上下とも上よ上る程誠よ丁寧でけす
 又下よ下る程誠に粗略よ成ります従前も上は役人様でも

加役の同心或は伊手先や何かは囚人を盡く疎略も致し
 ます。同「サア顔ア上げろ有休に申し上げろ」斯う申し升其
 の疎略ある事塵芥の様も致します。是が町奉行と申します
 と最う丁寧と云ふ譯では無いが頭を上げるとか頭を上げ
 るとか申しして誠に伊柔しうは坐います。先づ私共が座敷
 へ呼ばれました。上の方程丁寧です。門「掛りました。へ
 イ免被下さい。門「何だ。落語家へイ今日上又出す落語
 家で坐います。門「何てい名だ。落語家「柳櫻と申します
 門「左様か通れ。落語家「へイ。柳「はい。いけ疎略の事
 です。是が伊廣敷も参ります。と。柳「頼み申します。誰
 れ何だ。柳「エ。上へ出ました。落語家で坐います。ア、う
 かヤア。伊「苦勞様。柳櫻さんかサ、ア。此方へ。柳「斯うする
 と難有い少しの事ですが、さんを附けて呉れると「サア此方

へ。と休息所を通ります。と。煙草盆が出て居る。先生此方へ
 何うも。伊「苦勞だナ……。何處だい。寄席の……。善い鹽梅も
 昌するのう……。今も茶を進るから」と上へ出れば出る程
 又丁寧です。それです。から松平伊豆守殿伊保りでは坐いま
 す。伊「此「アやい宗吾郎何故道を以て事を致さん去る十
 二月二十日恐れ是れ有る將軍様も直訴致すと云ふ……。大
 膽不敵ナ奴で有るナ何故道を以て事を致さん……。何うじ
 や。宗「恐れながら宗吾郎申し上げます。將軍様へ直訴致し
 ます。る。砌り宗吾郎ア、勿体無いとの心得ましても無様將
 軍様も直訴致します。る。儀もは坐います……。國表も置まし
 て杉山彈正様よ訴へ罷出ました。る。處は取上げも相成りま
 せん。其の他十一ヶ所も訴出ました。る。處一向も取上り相

成りませぬそれ故に二百三十四ヶ村の者兩人宛五百何十
人江戸彦屋敷に罷出上屋敷又彦門訴と評議が一次致ま
したたがそれでいし彦領主様の名前と疵を附けるの道理で
相濟さんと心得まして私共始め忠藏七人の肝煎名主二百
三十四ヶ村の者を止め様と存じて「うれの宜しく無いから
止れ」と申しましても如何も気が立て居りまして江戸
表に罷出ます又依てそれを止めながら還據無く江戸屋敷
門訴致したたが取上が座いませぬ據無くは勘定奉行
村越長門守様に訴へ出でましたる處是も領主の添簡が無
ければ取上げる事の相成らんと仰せで座いまして夫
故據無く訴状を却下られましたして勿体無くも將軍様直訴
致します宗吾郎の心の中を推察を願ひます伊是れ
宗吾郎何れの役所へ訴出ても領主の添簡が無ければ取ら

上も成らぬ是は當然で有るぞ宗恐れながら宗吾郎申上
げます一体此度の願と云ふ者の役人方の歴制を致し
まする百二十四ヶ村の詮議を願ひまする儀は座りま
するうれを已れが非道を訴られる添簡の出さん事と宗
吾郎心得て居ります伊ウム是の宗吾郎の言事が道理だ
と伊豆守殿理よ詰りまして伊成程左様で有る夫れ故取
り上て遣ひすが是を強訴と申して領主の添簡の無のが是
を強訴と申します……取上て遣はすが堀田の百姓故堀田
引渡すがそれの承知かと云ふの仰せです宗堀田家よ
引渡されますれば貫く譯に参りませぬ二百三十四ヶ村
の者共塗炭の苦しみを仕りますから……堀田家より内々
は沙汰が有り何處も出ても詰る處は是れかと心得宗吾郎
一人身命を擲ちまして二百三十四ヶ村の者を安泰とむさ

して遣り度いと存じて恐れ入りますが勿体無と心得ながら
將軍様も直訴致しました儀には坐います何卒は慈悲を
以て二百三十四ヶ村の往立まする様偏願ひます伊ッ
は是宗吾郎此の願書の中封じた願書は是の上で取上げる
譯よの成らんぞ是の堀田家と遣すぞ其の他封無し願書の
棄置かれん儀も之有る依て残らず取上げて遣すぞよ
ハ、ア難有る座います伊ッエ百姓が使用う七十四通
りの道具残らず運上と致して有るが此の儀の何じや
恐れながら申し上げます百姓の使用いまする道具七十四
通りと申しまするハ鉄鋤鎌クルン棒藪取糸車に至る迄
七十四通りの農具残らず運上を取り又町人の方ハ竿筆盤
斗量碁盤將碁盤から祝儀不祝儀嫁取り智取り残らず運上
を取ります馴へ疊ハ年來も附き五分天秤棒ハ一本が一匁

の運上其他悉く運上を取ります元と印幡沼の周圍
の漁師ハ無運上で座います當領主様も相成り特の外
は運上が附さまして漁師の者共必死の苦しみを致します
印幡の淵も作ります麥米是の水損場だも依て無年貢も
座いまする處此度の悉く取立も相成り元來田と申すの
一反で三百六十坪の處一十三百坪も伊ッ竿入れも相成り百
姓町人途炭の苦しみを仕ります他領も逃亡致え或の妻子
を棄て印幡沼も身を投じ或の首を懸る者數を知らず二百
三十四ヶ村の十一ヶ寺と云ふ寺ハ悉く無住も相成り居り
まする儀も座います伊ッウッして先代の物の少しの形
が残て居らうナ宗恐れながら申し上げます天正十八年
より致して久能三郎右衛門様引續いて土井大炊頭様の
領主と相成りまして土井大炊様古河へは國替も成り時

堀田加賀守様お乗込相成て、前代加賀守様は逝去成りまして、當主上野介様も成て三百六十坪を三百坪とし、竿入も相成りて是より國許或乱と成て五ヶ年の間江戸屋敷も相成ると云ふのを免を願ひ度いと是故江戸屋敷敷く致したと見える……式部準人城代杉山彈正始め殘り四ヶ村の往立まする機偏願ひ申します伊「ウム余程昔酷く致したと見える……堀田家來ハ、ア伊「杉山彈正郡中総元締徳島勘解由町奉行田中惣左工門頭を上げる……彈正、其方よ問ふ事が有るが只今先代の事を殘らず取捨て新規の法を立てると宗吾郎申すが何で舊來の事を捨置いて新方の法を立てる……其儀の何うじや、杉恐れながら彈正申し上

げます私城代國家老を仰せ附かつて居ります、殿様御役由で伊座いますから江戸屋敷も伊出で國表も參る事も相成んは役中で……それ故主人の代りも國許の殿重に仕ります、田畑の事は是の筋違ひも依て彈正取上げません……竿入の事、郡中總元締徳島勘解由郡奉行牧尾越後の計らいで伊座いませう伊「ア、堪解由頭を上げい……左すれば其方共の計らいで有らう……杉山彈正の知らんと申すが其方の計らいで新法を立て并々竿入をしたで有らう、日本六十目の一反の三百六十坪は是の極まつて居る六十坪の阡陌散米と致して六十坪の上の法で下だして置く、それを三百坪も竿入を致すと云ふの其方共の計らいで有るか、勘恐ながら申し上げます元來佐倉の六万石の城附も伊座いまして纏延も成て居ります、それ故百姓

が横領を致しまして 伊比リアやいそれの佐倉斗りゝの
限らんと日本六十目の一反の三百六十坪と極まつて居る
うれを先代より致して別々竿を入れるいの上野介ゝ至
て竿入致をするは是横領の訴で有らうナ 勘否々中々左様
の儀で申座いません百姓共不屈に御座りまする故よ 伊
控へろりう斗りの申されまい百姓共の横領と言へば五人
か十人位なれば宜しいが二百三十四ヶ村揃つて江戸表よ
門訴致すのみならず此の宗吾郎が恐れ有る將軍様ゝ身命
を擲て直訴致すの容易あらん事じや…… 惣其方共の主人
の家ゝ疵を附けると云ふ事を致す怪しからん奴で有……
此度の伊豆守詰と調べるぞ…… 宗吾郎此の外ゝす法違ひ
の桶を出來御年貢米を取上ると致して有るが此儀の何う
じや 宗恐れおがら宗吾郎申し上げます是の町人頭樽屋

五兵衛の粹傳兵衛それゝ書狀が上げて御座います其願書
御披見遊されればそれゝて相解る事では座います 伊ウゝ
是より目安方が傳兵衛の上げましたる願書を取上げまし
て

乍忍以書付奉申上候

一 下總國印旛郡佐倉領町人五兵衛粹傳當時船橋宿茶屋渡世
柳屋平八方同居傳兵衛奉申上候私父五兵衛先祖より數
物家業仕來り先は領主土井大炊頭様は代苗字帶刀地面
拜領被仰付罷居候然る處當伊領主上野介様は代ゝ相成
り何の不調法も無之候ても先期より用來り候苗字帶刀
地面共去る明歴二年は取上被仰付右之節被仰渡候ゝの
先領主土井大炊頭代ゝの勤功も有之苗字帶刀並ゝ地面
拜領も有之當は代ゝの何のは奉公も無之ゝ依て地面

らず取上之と被仰渡其後牧尾越後様は屋敷に父五
平を被召出候て郡奉行村井外記様中村甚太夫様坂上
太様并は町奉行田中物左衛門様は揃て被仰渡候は
其方儀先領主土井大炊頭代は苗字帯刀は免地面拜領
之處此度取上は相成るの儀不憚之儀は有之間何れは
主様へ落別之儀奉公仕り先例之通りは免被仰付候様可
仕其れは附此度は用て斗桶五升桶二品細工成元締被
仰付右桶へ其方名前焼印相据可差上右は用所被仰付候
上の先期之通り苗字帯刀は免地面等元之通り被下置候
旨被仰渡父五兵衛難有は受仕候其後斗桶五升桶は
を下され候深サ高サを計り候處一斗桶は一斗一升五合
入と罷成五升桶の方ハ五升五合五勺入と罷成候は右之
儀申上候處升目之儀は其方よて差搦不申此方繪圖面通

り細工可仕旨被仰付候は付何とも不審に存じ此儀は辞
退仕候處殿敷は叱り候被仰付候は升目之儀は其方よ
て差搦無之事上之は用よて被仰付候儀能度相勤め可申
右ハは城代杉山彈正様伊裏印証文遣し候間早速取掛
り候様被仰付候は付父五兵衛下細工へ申付桶數二十桶
細工仕り焼印を据差上候處同年之秋御上納之節右之桶
よて年貢米御上納有之候は付百姓共難儀至極仕り其翌
年明歴三年之御年貢御上納之節先期之箱柄よて御上納
之事を農人共より願候得共御許し無之依て百姓共立腹
致し私父五兵衛が惡心より斯かる柄を造り候様は心得
同年十月二百三十四ヶ村之農人共一證を起し私父五兵
衛宅を打倒し其上郡方奉行頭取牧尾越後様并は村井様
中村様坂上様四軒之は屋敷へ押掛り既よ打倒り可申様

子よ有之候處堀田太和様出馬被及漸々相鎖り申候
其後何之傳れも無私父を入牢被仰付其後右之桶を造り
候儀不届と被仰立江原臺と申す處よて父五兵衛儀磔
掛けられ右之節私儀色々歎き申上五兵衛名代之儀願
候得共夫も不叶尙ホ家財取上國許追放被仰付當時下
總船橋宿柵屋平八方罷居候此度御尋ふ付奉申上候以
上

願人 樽屋五兵衛傳兵衛

証人 木ノ内宗吾郎

御聞き成されました伊豆守殿 伊ノム怪しからん事を致
す……惣左衛門頭を上げろ……是其方が五平を引廻しの
上貫樂の刑も行つたと云ふ扱もくも怪しからん奴じや
……其方の計いで有らうか 惣恐れながら惣左衛門申上

ます是の私の計らいでは御座いません上役の郡奉行越後
殿の計らいで如何も二百三十四ヶ村の農人の咽喉を詰
める奴上役人の落度とも相成る……詰り輕からん事夫故
貫樂の刑磔も行かふが善いと箇様申しますからりれ余
り手暴いから打首位で善からう申しましたる處越後殿が
聞きませんから據無く 越是く惣左衛門怪しかん事を
申す我等が何で左様の事をやした尊公の計らいで有らふ
……現らす百姓の喉首を詰めた奴だから磔よ 惣否は自
分 越否や貴様……此越後の知らん事 惣否やは自分が
伊是々控いろ己れが罪を人譲ると云ふ……惣怪しか
らん奴だ……堀田の家よの碌ナ家來は無いな何うも主人
の滅亡致す時の箇様致した者か……式部隼人兩人共よ
やし附けるぞ……杉山彈正始め現らす上より刑罰を申し

附けるよ依て取逃しては成んぞと殿重よ致して置けと伊豆守の面体眞赤よ成り十二人をシヨと御眼め遊ばす一同の者の保然と致した伊宗吾郎宗吾郎宗ハア伊其方の無封じの願書は上御慈悲を以て残らず御取上よ相成るぞよ……假令身命を擲ても其方の願ひの残らず買くぞよ宗ハ、ア難有う御座います伊忠藏始め後六人の者其方共の上で別よ御答ゆの無いぞよ……左様心得よ忠恐れながら忠藏申し上げます宗吾郎殿一人御刑罰よ相成りまして六人の者安閑と暮して居る譯の御座いませぬ……何うか吾々六人も宗吾郎と同罪よ御願ひ申し宗是々忠藏殿於前の血迷たか伊豆守の御情で有る……此宗吾郎は素より生命は無い事と心得て居る……此宗吾郎の此世を去つてから於前方の生残り何うか二百三十四ヶ村往立

つ様よ御願と申す……後よ妻子も残る事故何うか後々の事を御願だから六郎兵衛殿伊兵衛殿何分共よ後を願ひます……ハア難有う御座います伊三右衛門其方は宗吾郎始め七人の者を何の様ナ縁引が有て隠庇つて置いた其儀の何うじや三恐れながら三右衛門申し上げます私の房總三ヶ國に行商よ参ります砌り下總の佐倉よ参れ上岩橋村の宗吾郎殿の家よ泊ります何日何十日居りましても宿泊錢の三文も取りませぬりれで手廣く商を致しまして……何か宗吾郎殿よ恩返しを致し度いと思つて居ります此度は是々の次第で有るから隠庇て呉れると申しますから夫故は恩返しと心得宗吾郎殿始め七人の者を隠庇て置きましたので……此上何の様ナは沙汰がは座いましても聊かお恨みの座いませぬ……三右衛門何の様ナ御刑よ

成りましては是も木ノ内宗吾郎殿への恩返しで御座います。伊ッム年来世話も成り其恩返しと慈愛を以て七人の者を蔭庇つたる處上り於て別段は御答め無いとぞよ……今日此儘差許して遣はすよ……五平伴傳兵衛を蔭庇たも是も上り於て御寛大に見て遣はす難有く思ひよ別段は御答め御座いません。伊宗吾郎其方の堀田家へ引渡すよ依て左様心得ろ此時宗吾郎驚きました上の御手で御刑よ成れば妻子の助命ります堀田家へ引渡されては大邊です。けれど松平伊豆守様も其處には老中の義務でげす杉山彈正始め十二人と云ふ者残らず御刑罰を申し附ける乃で宗吾郎を上で御刑罰も成てり余り堀田を偏頗は伊豆守様が打潰ぶして仕舞います様ナ歸りれ故十二人の役人共の御刑罰を申し附ければ宗吾郎の堀田の手で刑罰もさせん

けりアあらんと是丈が伊豆守様が義務を御立て遊ばしです其義務を御立て成すつたのが宗吾郎の災難です伊其方一人堀田の手へ引渡す宗ハ、ア任方が無い伊堀田家の家來立ちませいと云ふ伊聲が掛る小島式部松澤集人の兩人様側を向いて立ちませい十二人の者の是も附いては評定口からドヤ、出て参ります白洲の宗吾郎始め立てい是も於て残らず立上りました堀田の家來の最う往けません戸外出も出来ません兩人附添ひまして伊上役敷も立歸ります扱て宗吾郎の伊堪定奉行村越長門守より堀田の手へ引渡し相成て堀田家での如何も宗吾郎の憎いから早速鉄綱籠で十二里の處を嚴重に送り相成り上岩橋の直ぐ様御捕方が向ひ妻子を召捕りまして愈も六人

共御刑罪ノ相成ト云フ鳥渡

第九席

エイ先日ハ松平伊豆守様ノ裁決ナリ上げて置ました
 万治二年二月二日で伊座います堀田の家來ハ殘らず政
 府よりハ刑罰を申し附けますソレ故宗吾郎ヨリハ責めて
 堀田ノ手で刑罰よさせませんと伊豆様も同じ老中では坐
 いますから余り老中ノ義務を失ふと云ふので宗吾郎一人
 堀田ノ手でハ刑罰も成ります是が政府では刑罰も成れば
 女房子ノ助命ります處が堀田ノ手でハ座いますからさう
 ハ往きませせんエイ白洲よりハ勘定奉行村越長門守殿がハ
 引取成すつて直ぐ堀田家木内宗吾郎を引渡します是



よ於て宗吾郎の早速鉄網籠よて監重よ致して十二里有る
佐倉に送り立てよ成り早速入牢上岩橋村よの扭方を向け
まして妻子を殘らず召捕りまして是も入牢では坐います
處が牢を三ツよ致しまして中央よ宗吾郎を入れ左の方よ
女房おさん今年三歳よ相成る乳兒の三之助それから宗吾
郎の右の方の半の惣領の今年十二歳よ相成る宗平其次が
今年十歳よ相成ります源助乃で三番目の喜八是の今年
八歳よ相成る男の兒を半よ三人一緒よ入れ中央が宗吾郎
一人左方の女房と乳兒と同半何うも實よ情け無い事で
す同牢よ入れて置けば少しは是で咄しを致す事も座い
ませうが別々では座います何しろ三人の子が皆男の兒で
淨座いますから源阿母さんく喜阿父さんくと云
ふが宗吾郎の只念佛斗り唱誦して居りまして無言では座

いませ女房おさん一ツ良人の半を隔つて居りますから
呼ぶ譯よも往かず只乳兒の三之助を抱て涙斗り翻して居
ります宗吾郎は宗二百三十四ヶ村の者か先づ是よて我
泰己れの願も貫徹いたか併しながら自分でも子供等迄
は刑罰よ成るとい氣が附きません堀田で子供四人は助
命て呉れるだらうと思つて居りました處が宗吾郎は六人の
子供が有りまして長女が下總國小野村内藤外記と云ふは
旗本の領地よ居ります百姓甚蔵の許よ嫁よ参つて居ります
是が長女初と申しまして二十二歳では座います乃で妹の
雪と申し當年十九歳よ成りまして是の常州波崎村荒木對
馬守様の百姓作右衛門方に嫁いて居ります此姉兩人の方
の他領よ往て居りますから是よ別よは咎めは座いま
せん子供等四人助命れば姉二人の方よ引取らせられる宗

吾郎も女房も此二人が有るからと安心して居りました四人の子供等はよもや生命は取らざるまいと思つて居ります兼て夫婦の生命の無いのは是れ最う覺悟の上では座います處が張り番の者の宗吾郎夫婦子供等は何も意趣も遣す處が無い城代杉山彈正始國の役人共の壓制を致す處から實に上役人を恨んで居る位でけすから妻子を撫恤して居ります巡視の來ない時の半屋外柵を出して子供等四人の遊ばして居りますので張り番が半から出して呉れると枯子よ擱まりまして三人の子供等が子阿父さんく……阿母さんくど云ふが宗吾郎は兩眼を閉ぢて別口も利ません宗平が宗平阿父さんく宗平、宗平や柔順うせよ……弟を撫恤して遣らんければならんぞよ宗平、ハイハイと言つて只顔を見るのみの事で乃で半屋見廻りが来る

と張り番が取り急いで子供等を半の中に入れてピンと錠を叩きます扱て二月三日頃に入半致しましたが其間も別よ何の沙汰も座いませんソレ故に子供等四人は先づ安泰と心得て居ります其中に諸方から致して宗吾郎始女房四人の子供等の命乞を致す歎願の大邊に出で居りますせうソレは瀧澤村の佛頂寺の孝善と云ふ是れ宗吾郎の叔父よ當ります此和尚が歎願を出で居るが一向は取上が座いません扱其中に二月廿六日の朝では座います半番宗吾郎今日の呼出したから支度よ及べ宗平、ア……扱こり今日の落着よ相成るか……惣斯ふ云ふ事あれば早く此世を去る方が善かつた子供等も半舎の苦みの助かるだらう……おさんやく三、ハイ宗支度よ及べ是から子供等四人よ支度をさせ宗吾郎女房おさん都合六人で役

所へ罷出ます今日山本源太夫と云ふ方の係りでは
座います宗吾郎夫婦子供等四人白洲に出ます目安方と公
用方が整然と控へて成り下り張番の者の砂利の上よ
控へて居る荒越の上よは宗吾郎夫婦傍ら子供三人が兩
手をついて控へます三之助の未だ三歳では座います
から母親の懐ろよ手を入れて乳房を捻つたり摩つたりし
て居る無心ナ者ぞげす今首を切られると云ふのも知らず
よ致して母よ絶つて居ます源宗吾郎……妻さん兩人
ハ、ア源頭を上げる……此度恐れ之有る將軍様と直訴
よ及び……其方の願は新法を取捨て舊法で上では法を
立て下さる様よと云ふのを其方が買いて將軍家と直訴致
したので二百三十四箇村の者も此度安泰よ活計方が出来
る是則ち其方の願は貫徹いたる事だぞよ宗ハ、ア難有

い仕合よ伊座います源就ての杉山彈正始め十人の役人
ども政府より重きは刑罰を受けたソれよ於て宗吾郎其方
共夫婦ども貫衆の刑を仰付られる……難有は受よ及べ
宗難有う伊座います……サ、おさん上は役人様方が一
よ政府より致して重きは刑罰よ成られたとの事……其方
此宗吾郎兩人は磔の刑よ行はれるとの只今は役人様の仰
せで有る難有は受を致せ三難有うは座います四人の子
供等は助命て下さる事と思つて居ると源太夫殿反す言葉で
源子供等四人は死罪を申附るぞよ是は源太夫殿の元々
宗吾郎よ遺恨は無し何も子供等四人迄斯う成さるさうは
無さ、うッ者だと思つて役人でもア、怪からん事だと思つて
居りますケれども其御役で御座いますから宗吾郎よ附
けなければならぬ子供等は死罪を申附るぞよと自ら人

情でげすから其言葉も濁ります宗吾郎 宗ハッとの思ひ
ましたが今更何の様も願ても御聞入れは有るあい子供等
は許して呉れまいと思ひましたから 宗難有い仕合も御
座います……宗平源助喜八三之助は未だ乳兒で有るが其
方共四人死罪討首の刑を仰せ附かつたぞ……難有く御受
を致せ 三否々妾の不服で御座います……恐れあがらず
し上げます私夫婦は磔の刑とやらも行はれまして宜し
う御座いますが無心の子供等も何答が御座います……兄
宗平の當年十二で中が十歳も八歳で此子の僅三歳では座
います未だ東西も解りません子供や乳兒が何の遣儀が有
て討首と被仰います……是の妾の不服で御座います 宗
コレ 未練者奴が……上重きは役人の残らずは刑罰に
伊成んあさる此宗五郎の願が貫徹いたる上からの宗吾郎

の生命の無いと心得て居る……和女も此度の其夫宗吾郎
と借よ此世を去る所存で無いか……子供等四人後に遺
して冥土も参た處が斯う云ふ壓制の世界も置いて参れば
心配だソレよりの寧ろの事四人の子供等も共冥土も速
れ往き結構の世界も再び出して遣るのが親の慈悲だ……
難有い受を致せ 三否々何を被仰つても妾の難有いとほ
受を致す事の出来ません……何うぞ御願で御座いますか
ら子供等の御助け下さる様に 宗未練ナ奴だナ……白痴
奴……宗吾郎難有御受を仕ります源太夫の涙斗り何うも
出まして堪らん位でけすから上を向て鼻紙で顔を抑へて
居ります處へ椽側よ侍へい申し上げます。源何じや
侍佛頂寺の孝善が只今是よ罷出まして御役人様も御願が
之有趣よて出て参りまして御座います出家の事での有り